第２章　四万十の村々を歩く

本章では、四万十川流域における大字単位の村での文献調査、古老への聞き取り調査、踏査の成果を報告する。まず、戦国末期に村ごとに作成された土地台帳『長宗我部地検帳』(以下『地検帳』)) から中世末～近世初期の村の姿を復元し、続いて聞き取りから明らかになった「昭和期の村の暮らし」を報告する形式で、計９村の地誌を記す。四万十町の藤ノ川については、盆供養の民俗例を紹介する。

１、鴨川－京都の鴨川に由来？

中世の土佐一条氏時代に、京都の鴨川（賀茂川）にちなんで名付けられたという四万十市中村地域の鴨川地区。中世には、一条氏と関係の深い土佐清水の金剛福寺領が広がっていた。板ノ川村の北にあり、衣掛(きぬかけ)山と右城(うしろ)山の２つの山の北東斜面を流れる岩田川の中上流域に集落と水田が広がる。集落は下流から口鴨川、中鴨川、奥鴨川の３地区に分れて散在し、江戸時代は鴨川村と呼ばれた。ここでは口鴨川を中心に村の歴史的景観と生活誌を記したい。

集落センターから見た口鴨川集落

（一）『地検帳』に見る村落景観

天正 18 年（1590）3 月の長宗我部氏による検地の台帳『地検帳』（式地村地検帳）では、「口鴨川（口賀茂川)」「中鴨川」「奥鴨川」が現在の大字（口鴨川・奥鴨川）に該当する。また、色紙村内の「藤川」(「奥藤」と「藤ノ川」で構成）も後の鴨川村域に含まれると考えられる。すなわち、中世の鴨川地区は土豪・敷地氏が拠点とした式地村内の集落であった。検地された土地面積は 22 町２反余、屋敷は計 65 軒（竜福院・光泉寺を含む)。中鴨川は全て足摺領（金剛福寺の寺領）になっており、奥鴨川は全てが散田[1)]となっている。各土地に「古帳ナシ」という表現が記されており、過去の検地で検出された土地とそうでない土地が判別できる。口鴨川を中心に『地検帳』記載地名を聞き取り調査[2)]により現地比定し、戦国末期の村落景観を復元していく。

（１） 集落

まず『地検帳』の屋敷地の現地比定から、口鴨川の集落分布を読み解いていく（図１)。岩田川下流では、東側の「コタチバナ」谷口にある「太郎地（太良地)」周辺に、「橘川クチ」「等蔵居」「窪ヤシキ」「太良地屋敷」「柿木ヤシキ」の計５軒の集落（①）が確認できる。加えて、「躍堂」（定芝）と呼ばれるお堂も記されている。「窪ヤシキ」には、給人の冨永武

1) 田地の作人や屋敷の居住者が明記されていることから、散田は「荒地」でなく、名田と区別して設定された長宗我部支配下の土地と考えたい。

2) 聞き取り調査は 2012 年 6 月 29 日に中村連合青年団の地域調査の一環で実施し、地元の伊与田瑞穂氏（昭和 10 年生)、栗本徹氏（昭和 14 年生）にお話しを伺った。調査の対象は口鴨川で、中鴨川、奥鴨川については未調査である。

衛門が居住している。 また岩田川西側の「森屋敷」周辺に「ヲキヤシキ」「ヲキヤシキノ北」「道ヤシキ」「弓場ヤシキ」「龍福院」「モリヤシキ」「河内ヤシキ」「河内ヤシキ南」の８軒（②）が確認できる。『地検帳』では、この一帯を検地した後に「川ヲ渡テ西路下ノ橘村」との記述があり、「河内」などの地名から岩田川の旧流路（図１破線）が西側に（も）あった可能性が考えられる。西側の山添には「田中」「坊ヤシキ」「ヲカタヤシキ」「渡上」「新ヤ屋敷」に５軒（③）、岩田川沿いの「スナゴ」近くには「助兵衛ヤシキ」１軒（④）がある。上流にいくと、東側の「カミナロ」には「□太良ヤシキ」「カミナロ井溝懸テ」「小松サコ」に３軒（⑤）、岩田川西側の「九日テン道懸テ」「九日テンウエ山ススレ」に２軒（⑥）、「宮崎ナロ西道懸テ山ススレ」に１軒（⑦）が確認できた。「リヤウ僧」（1 軒）、「ホハヤフ」（1 軒）の場所は現地比定できていないが、おそらく「宮崎ナロ」の北側にあったと推測できる。『地検帳』の表記から、①を「橘川」、③を「橘」、⑤を「上平」と小集落名で呼んでいたことが分かる。

図１　戦国末期の口鴨川の集落

このように戦国末期の口鴨川では、屋敷地が岩田川の両岸に散在的に広がる景観を有しており、台地状の「ナロ」や山裾を選んで集落が作られたことが分かる。

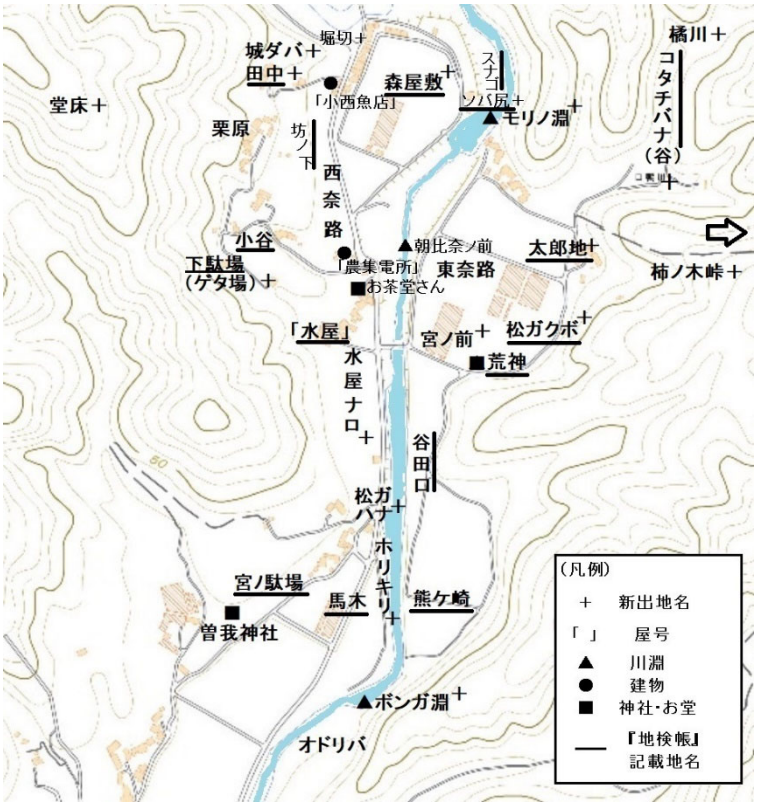


図２　鴨川の地名地図（岩田川下流部）

（２）開発・水利

次に『地検帳』の田地分布から口鴨川の耕地や水利を復元する。下流部から見ていく（図２）。岩田川東側は「コタチバナ」の谷川が「太郎地」「松ガクボ」「荒神」「谷田口」「熊ケ崎」まで道沿いに流れており[3)]、谷川より下の水田はここから利水していたようである。また、川より上の土地では、谷沿いには田地が見られるが、山裾の水が取れない場所は畑地が開かれている。

[3)]『地検帳』の「道ソイ」「道懸テ」などの表現から推測した。

西側では、「森屋敷」周辺は主に屋敷地で、屋敷に隣接して 2～15 代と小規模な田や畑が数筆あるが、荒地が多い。近くの「ソバ尻」に池があることが記されており、「スナゴ」にある田も含めてこの池から利水をしていた可能性がある。「水屋」「小谷」「下ダバ」「栗原」「田中」などの山裾にも田がある。「栗原成亥ノ谷」などの記載から山裾の小さな谷から利水して田が作られていたことが分かる。

中流部（図３）は、東側で「猪ノ谷」の水を引いた「カミナロ」「中コウタ（神田）」などの田が７筆ほど確認できる。「カミナロ井溝懸テ」の記述から、「猪ノ谷」から水路を引いてこれらの田に利水していたことが分かる。西側にある「九日テンウエ山ノスレ」（22 代）、「コタツメ」（9 代）、「山ノ神谷口前地」（44 代）は小さな田で谷奥の谷田（迫田）と考えられる。「宮崎ナロ」は畑地、「井テノナロ」は荒田である。

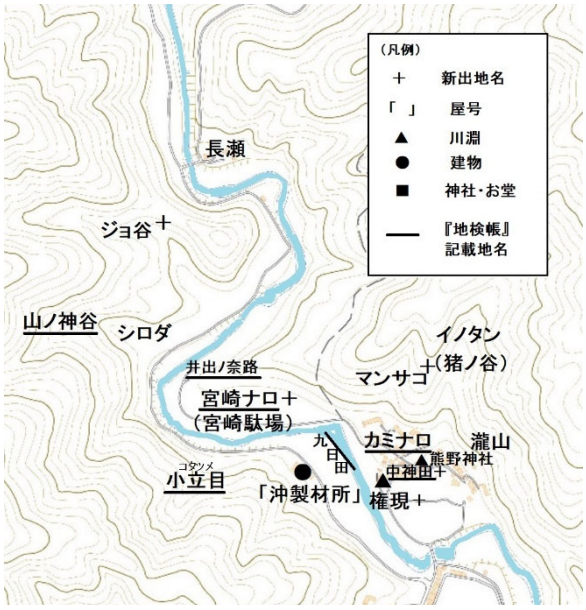


図３　鴨川の地名地図（岩田川中流部）

このように見てくると、口鴨川では戦国末期の段階では、岩田川からの利水は行われておらず、耕地は山裾の小谷沿いの谷田と、比較的水量の多い「コタチバナ谷」「猪ノ谷」から利水した谷田と平地部の水田で構成されていた。山裾には畑地が散在している。また、『地検帳』（「式地村切畑地検帳」）には口鴨川（「谷タセイ本」「大タノ谷セイ本」「井ノ谷北ノ谷入」「リヤウ僧ノ北」「レイタイヤシキ」）、中鴨川（「サセフカナロ」「城ノ川ヤシキノウエ」「□ノ平」「古城フチノウエ」）、奥鴨川（「ハセノ川宿ノナロヲク」「□スノ木ハラ」「川サキヤシキノウエ」「名本ヤシキノ林道懸三所」）、藤川（「ナカセ」「コサキ」「奥藤川ヤシキノスソ」「六良ヤシキ」「六郎ヤシキウエノ谷」「ウ子サコノムカイ」）にそれぞれ切畑（等級はいずれも下）があったことが記されていて、谷奥や山地で焼畑の開発が進んでいたことも確認できる。

（３）土地支配

『地検帳』で口鴨川の土地支配を見ていくと、森氏や中村氏、下家地氏など多数の給人が分散的に土地を所有しているが、そのほとんどに「栗本分」「若藤分」「冨永分」の注記がある。土地管理等の実地支配は在地の栗本氏、若藤氏、冨永氏によって担われていた状況が確認できる。一方、金剛福寺領の中鴨川は、名本九郎兵衛と吉武拾介、奥鴨川は「名本ヤシキ」に住む二郎左衛門によって土地の耕作・管理が行われており、異なった土地支配の様相を呈している。

（二）昭和期の村の姿

（１）地名

オドリバ　板ノ川の分。神社の御神輿が出た時に踊る場所。

宮ノ前　土地改良が行われる前はお宮があって、部落の人の遊山場（遊び場）として使われていた。広い田んぼの真ん中にちょっとした祠がまつってあった。現在は「カミナロ」の熊野神社に合祀されている。

堂床　「ドウトコ」と呼ばれる山の上に海の神様を祀った祠があった。村全体で祀っていたが、今は氏神の曽我神社内に下ろしている。

お茶堂さま　観音さまを祀る。

長瀬　奥の谷はめっそうウナギがいる谷だった。

発電所　昭和初期にスイスから技術者が来て作られた小水力発電所。当時は太陽のような形の大きな水車にモートル（電動機）が据え付けられ、各家庭に電力を供給していた。地元の小松さんがもり（水車番）をしていたという。その溝（水路）が今も残っている。

牛ノ首　お地蔵さんがある。

湯屋ノ谷　「鴨川のゆや」と呼ばれ、冷泉が出ていた。

御用屋敷　昔集落があった。

シオリ　昔神社があって、シオリ権現と呼ばれていた。

シバ神さま　シイの葉など緑の葉っぱ（芝）を供えて祀っていた。

藤ノ川　平家の落人がいたと伝えられるのが「藤ノ川」。あちこちに７つの地蔵があった。

ガネゴエ　カヤ山があった。講組の山で出役で刈りに行く。

岩田川のモリノ淵

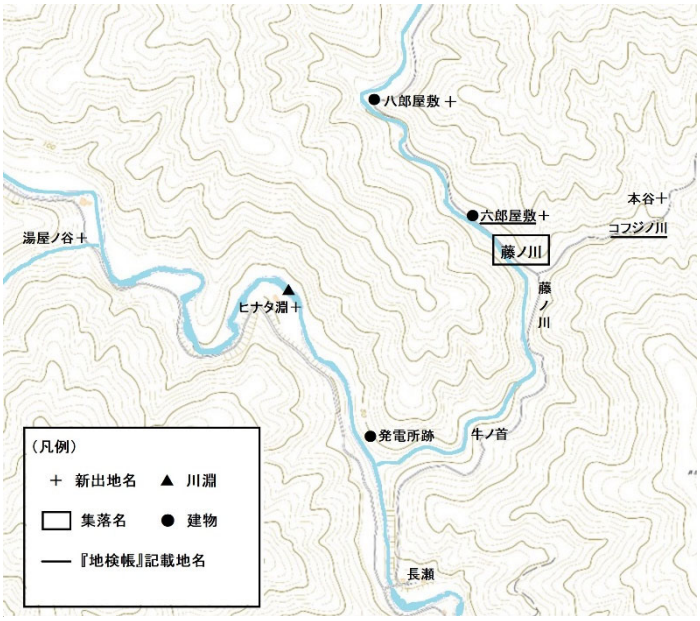


図４　口鴨川の地名地図（最上流部）

図５　中鴨川の地名地図

（２）集落・宗教

中世に式地村の集落だった鴨川は、江戸時代には鴨川村に村付される。18 世紀半ばの『寛保郷帳』によれば家数 73、人数 385、馬 109、猟銃 15。『西郡廻見日記』（1801 年）によると利岡村大庄屋の支配下で、口鴨川・

奥鴨川に各１名の名本がいた。明治時代には口鴨川村と奥鴨川村に分かれ、現在の大字・口鴨川、奥鴨川につながっている。社寺は、1815 年の『南路志』に鵄（はいたか）大明神・荒神・権現・白王・竜福院（退転）が記載されている。また、奥鴨川の奥に炭焼きのお宮さんがあり、お祭りをしていたという。

戦後の口鴨川では、商店は「農集電所」と呼ばれた朝比奈さんの家１軒。干物や雑貨、お菓子などを売っていた。それ以前は小松久米太郎さんが店をしていたが止めて、次に「小西魚店」というのがあってその後「朝比奈商店」ができた。「農集電所」は農集電話を置いていたことからそう呼ばれた。電話がかかってきたら番をしている朝比奈さんが、放送して読みあげる（呼ぶ？）。東京から電話がかかってきたこともあったという。

（３）生業

牛と草　戦前は田では米のあとに麦を作った。米や畑で作る野菜は自家用だった。昭和 20 年代には口鴨川に田が 18 町（今は８町）。田を耕す牛は黒牛。ばくろうは愛媛県松野町から来て、牛の売り買いをしていた。牛のえさは河原に生えたあぜ草を与えた。牛の種付けは、中村のドウメキにあった種付け場でしていた。赤鉄橋の下には牛市場があったという。

カジ　紙の原料になるカジも山で切って集め、蒸して出していた。

沖製材　奥鴨川で山を買って、材木を荷車・馬で引っ張ってきて板材にしていた。火事になって焼けてからやめた。

材木　鴨川には、山師もいた。谷をこかして集めて、人が材木を持って出す。深い山ではキンマを使って出す人もいた。木の値が良かったので材にするものも。チップにしたり、浅木を切ったりすることもあった。

炭焼き　ほとんどの家が炭焼きをやっていた。自分の山で焼く人も、山の上木を買って焼く人もいた。炭窯は谷沿いで小屋をつくって火の番をする。山から出す時は、肩にかついで出してくる。男も女もかつぐ。農協に炭を売るのだが、その前に検査があって、売値がきまる。山の下まで炭を出しておいて、時間を決めて検査がある。夏でも冬でも炭焼きさんが一番えらい。製材の沖さんが出資して人に焼いてもらって、炭を集めて売っている時もあった。

果樹　集落内ではリンゴやミカンを植えたこともある。一時期だんだん作りよったが、ミカンは消毒が体にこたうとやまった。

（４）交通・流通・娯楽

交通　柿木峠を越えると田野川に出ることができる。

行商　電気製品売り、干物売り、豆腐売りが来ていた。物々交換で米と商品を換えていた。

娯楽　人形芝居も来て、個人の大きな家をかりて興行をする。みんなで見に行った。映画は上映に来る形で、保育園（合同の保育所）や板ノ川のお宮の下でやっていた。昭和 20～30 年代、チャンバラ物などの映画を見にいった。子供が手を叩いて喜んで見ていた。

口鴨川青年団　芝居は踊ったり、唄ったり。作り芝居は人から習ってやった。広い家を借りて舞台を作って上演した。田野川に芝居を見に行ったこともあった。

（楠瀬慶太）

２、江川　　流域に点在する中世の名

四万十川支流の江川川流域にある四万十市西土佐地域の江川地区。前近代は下山(しもやま)郷上分の一村で、江川・中家・庭田・押谷・大江・市野々・権谷の集落が江川川沿いに点在する。ここでは、中世に流域の土地開発を担った「名(みょう)」（有力百姓の土地）に着目し、本村、中家、押谷を中心に村の歴史景観と生活誌を記したい。

押谷集落

（一）『地検帳』に見る村落景観

天正 17 年（1589）の『地検帳』（下山郷地検帳）に見える「江川名」の領域は、現在の江川地区より広域である。江川名内には、江川村・小川村・平野村・中家村・中家地村・押谷(おしたに)村・大江村・一野々村・権谷村・永生(ながおい)名村・松ノ窪村・下方村に所在している。このうち江川村、中家村、押谷村を中心に『地検帳』記載地名を聞き取り調査[4]により現地比定し、戦国末期の村落景観を復元していく。

（１）集落・宗教

【江川村】　江川名の中心地であったと思われる江川村は、現在の大字・本村にあたる地域であるが、『地検帳』記載地名は現地比定できるものが少ない（図６）。本村の中心部には「カミヤシキ」「名本ヤシキ」など５軒と長善寺、「中ノ前」周辺に「井上ヤシキ」１軒、場所不明だが「舟戸ヤシキ」1 軒、対岸の「タテ川」に１軒、集落「谷組」辺りに「中ノヤシキ」など５軒が確認できる（図１）。本村中心部の５軒は散在し現在のような集村化した形でな

図６　本村の地名地図

[4] 聞き取りは 2011～2012 年に継続して行った。本村は沖入船さん、中野泰国さん、中家は柴成子さん、市川美典さん、市川史郎さん（昭和 20 年生）、押谷は武内勉さん、武内美鶴さんにお話しを伺った。

かった。「名本ヤシキ」には名本野村太良左衛門、「カミヤシキ」には紙屋勘丞がいて紙の製造が行われていた。

「舟戸ヤシキ」には隣接して「フナツケ」（畠）のホノギが確認でき、川湊があったことが分かる。「舟戸ヤシキ」は「権谷名」の給地で権谷村に多くの土地を抱える源六の管理になっている。「フナツケ」は江川名分で名本野村氏の管理である。彼らと舟運や材木流しとの関係が想定される。上山氏の元で材木搬送などを担っていたとされる森野監物[5]が、江川村内の「ヲモタ」や江川川河口の「竹ノ内」「下キレ」にも田地を持っている点も興味深い。

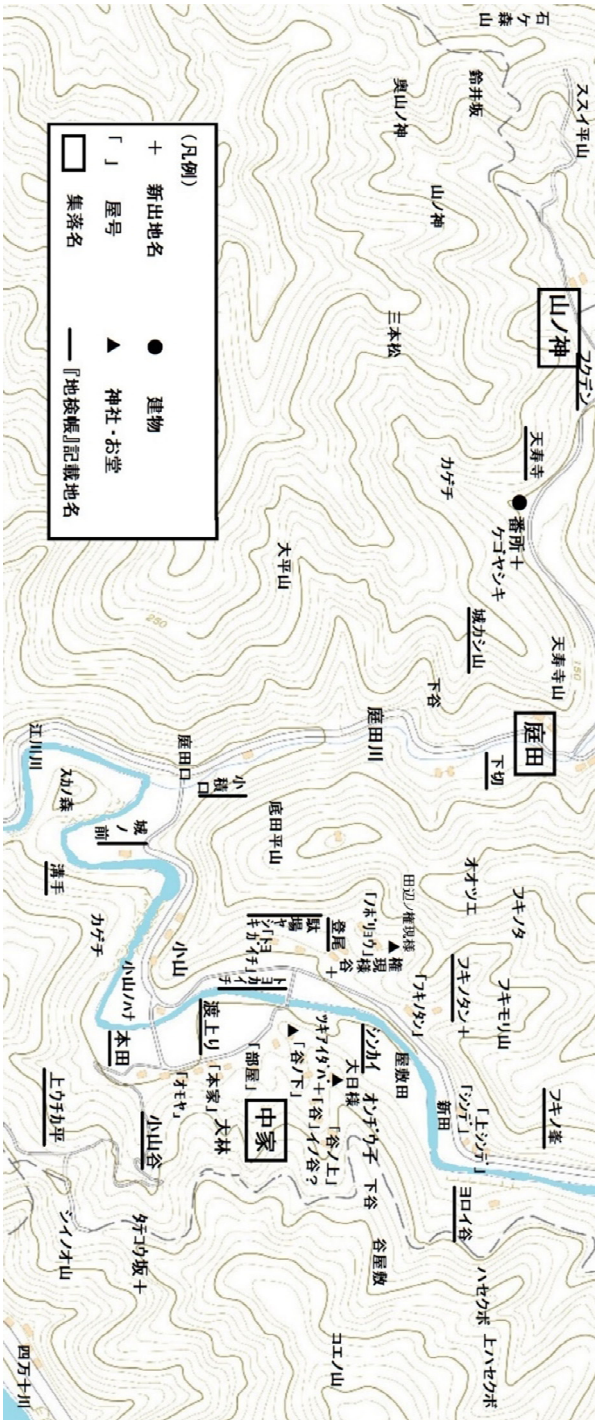


図７　中家・庭田の地名地図

土地支配についてみると、井上善兵衛、吉良兵庫らの給地が散見するほかは中世に当地の支配・開発を担ったであろう「江川名」分が多く、「抱」の形で「名本」や「甫喜名」「尾崎名」が田地の管理をしている状況が確認できる。「甫喜名」は本村中心部の「ホキヤシキ」、「尾崎名」は田や屋敷のあるホノギ「尾崎」に起源を持つ江川名（本名）の脇名であろう。

また、江川村内には「小島神テン」「サンノウ神テン」などの神田の存在から、所在地は分からないが小島明神（現小島神社）、山王権現（現日吉神社）があったことも推測できる。

【小川村・平野村】　小字「小川」周辺の小川村には１軒、小字「上平野」周辺の平野村に２軒がある（図６）。「小川名」の表記から中世の小規模な百姓名（脇名）に由来するものと考えられるが、「江川名小川分」とあり江川名の支配下にあったようだ。平野村の「ヒラノヤシキタノ南」には神官とみられる「太夫」が居住していた。

【中家村】　中家村は「城ノ前」から始まる村で、江川川東側の山裾に中家集落中

[5] 目良裕昭 2019「土佐上山氏の支配領域とその構造」『続土佐の地名を歩く』地域資料叢書 18。

心部に「大向ヤシキ」「ハサ」「イノ谷ウへヤシキ」の３軒と「小林庵ヤシキ」（寺中、現大日堂か？）１軒がある（図７）。対岸には「ノホリヲヤシキ」（登尾）「神ヤノ谷」「仁井ヤヤシキ」の３軒があった。ほとんどの土地は「江川名」の給地だが、「大向名」または「興名」の併記が見られる。地名が確認できず場所は特定できないが、それぞれ中家中心部に比定されるホノギ「大向ヤシキ」、「ヲキノヲキ」に起源を持つ脇名と推測される。この地域の開発は「大向名」「興名」によって担われたのだろう。

押谷の五輪様

【押谷村】　押谷川河口南側に「川ソネ」（カワゾネ）１軒、小字「黄幡」付近に「宮ノヲク」「名本ヤシキ」「中島ヤシキ」の３軒がある。現在、立派な五輪塔が「五輪様」として祀られている土地には現在集落はないが、戦国末期はここが名本の住む押谷名の拠点だったことが推測される。「宮ノヲク」の表記から現在は押谷川奥にある黄幡神社も当時はこの場所に所在していたのだろう。また、川南側ではホノギ「ナカマ」と「コセコセ」の間に「アンヤシキ寺中」が見られる。通称地名「テラコセ」や小字「フルアン山」などがあり、寺があったものと推測される。小字「コヤノ谷」の谷口に「カケチヤシキ」（陰地）１軒、「藪ケ谷」の谷口付近に「ヤフカ谷ノ南ノウへ」「ツカヲヤシキ」の計３軒がある。押谷川の北側では「上ミ谷」沿いに「サンシホウヤシキ」「松ノ本」の２軒、小字「中屋敷」の周辺に「ツルイノ本」１軒がある。このように押谷川に流れ込む小谷沿い屋敷地が、川奥まで点在していたことが分かる（図８）。

（２）　開発・水利

『地検帳』記載地名が多く現地比定できた中家村、押谷村から土地開発の状況を見る。

中家村（図７）では「大向名」「興名」の存在から田地の多い江川川東側から開発が進んだものと推測される。低地部の「本田」（７筆）「渡上」（６筆）は大小の田が棚田状に広がっていたようである。いずれも上田または中田で収量の良い田である。「小山谷」「イノ谷」から十分な水量が確保できたのであろう。山裾では畑地や切畑も若干見られる。対岸の「小山ノハナ」（３筆）「トヨカイチ」（７筆）にも上田・中田があり、「トヨカイチ溝ノ下」の記載から「権現様谷」（『地検帳』「神ヤノ谷」か？）より溝（水路）が掘られていたようである。川沿い低地部の「シンカイ」（４筆）「城ノ前」（10 筆）溝手（1 筆）にも田地が見られ、かなりの土地が開発されていたことが分かる。

押谷村（図８）では、川沿いの田地は「川成」（６筆）「ホンテン」（３筆、地名「テラハ

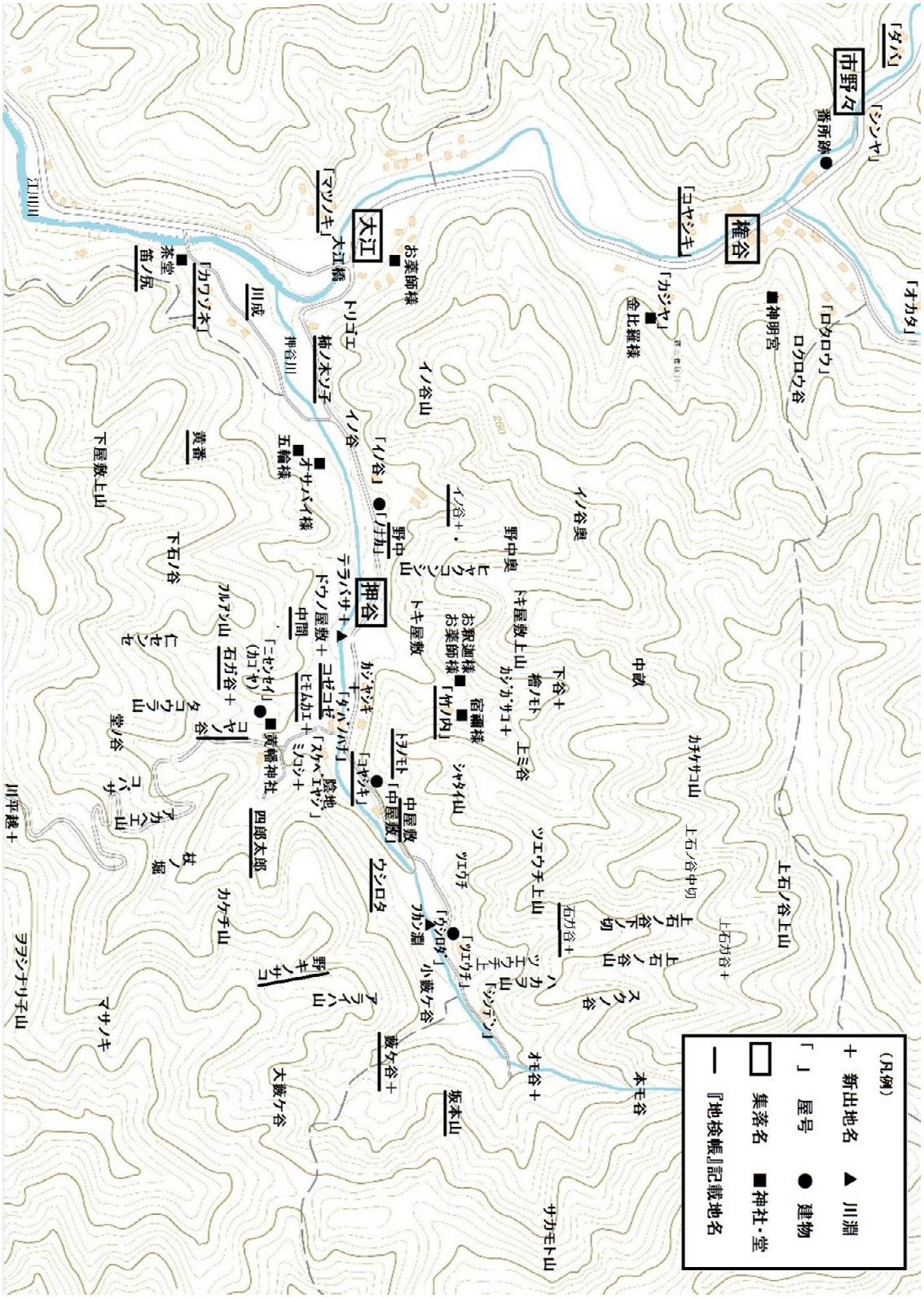


図８　押谷・大江の地名地図

サ」の辺りか）がいずれも上田であるが、「本四十五代地」「前廿代地」などの記載から、水害によって水損して面積が減っていることが分かる。江川川沿いの田地にはこのような表記が多い。押谷川沿いに流れ込む小谷沿いには谷田が広がり、山裾には山畠、切畑が多く開発されていたことが分かる。

（３）中世期の名の復元

『地検帳』から遡って中世期の江川川流域の名を復元すると図９のようになる。江川川河口の本村に「江川名」と「甫喜名」「尾崎名」があり、川をさかのぼると小川に「小川名」、庭田に「江川庭田名」、中家に「大向名」「興名」、押谷に「押谷名」、大江に「ヲエ村名」「ダバ名」（ダバヤシキ）、市野々に「一野々名」、権谷に「権谷名」があったと推測される。この領域で記載がある「後岡名」「ヲモヤ名」は類似した地名が残っておらず、所在地を確認できない。『地検帳』で権谷村は全て権谷名の給分になっており、この段階では江川名に対して権谷名は独立性を持っていたことが推測できる。一方、それ以外の名は全て江川名の管轄下にあったと推測されることから、江川名から派生した脇名であると考えたい。

図９　江川川流域の中世期の名の復元

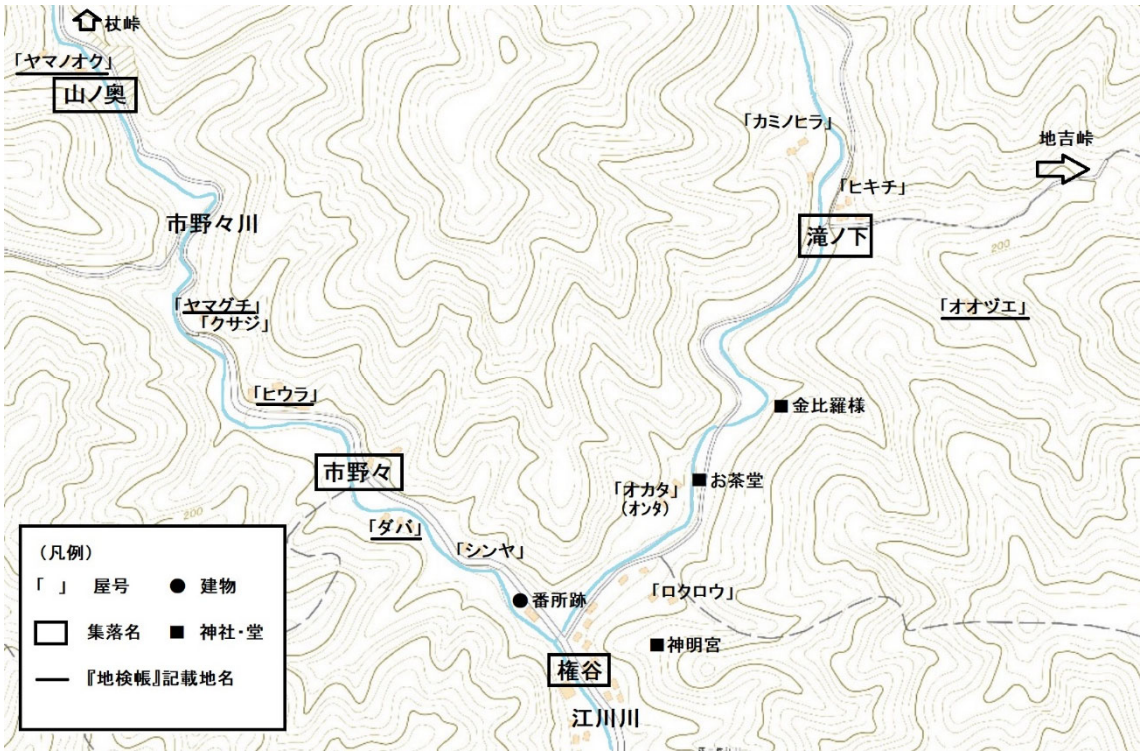


図 10　権谷・市野々の屋号地図

（二）昭和期の村の暮らし

聞き取り調査を行った中家（中組）と押谷を中心に民俗誌を整理する。

（１）地名

【押谷】

押谷の由来　昔の古老に聞くと、この地域には昔「おし」（唖、発話障害者、言葉がはなせれん）の人がいたことが、押谷の由来だという。（外から来た人が）ここには人が住みよらんろうと思ってこっちから流れてくる川（押谷川）を見よったところ、竹細工を削った物が流れてきた。人がいると分かって押谷と名付けたらしい。

屋号「竹ノ内」　武内家も昔は竹ノ内の姓を名乗っていた。西土佐の藤ノ川にいたゆきおさんの家は竹ノ内と名乗っている。

フカン淵　押谷川の深い淵。「大きな蛇がおるきいかれん」と言われた。四万十川の「キミガ淵」へつながっていると言われており、卵を流したら「キミガフチ」に出たという話もある。20 歳くらいの女の人が、淵のはたで洗濯をしよって目が見えなくなったという蛇の祟りの話を聞いたことがある。

（２）集落・宗教

江戸時代の江川地区は、17 世紀末の『元禄地払帳』によると地高総計 540 石余（本田高 447 石余、新田高 92 石余）で、本田（『地検帳』記載の土地）に対し新田（『地検帳』以後のに開発された土地）はわずかで、江戸前期の開発は小規模だったことがうかがえる。本田は藩主山内氏の蔵入地（直轄地）、新田は井上作之丞らの領知で、残りの 6 石余は貢物地となっている。18 世紀前半の『土佐州郡志』では家数 102 余、18 世紀半ばの『寛保郷帳』では家数 129、人数 585、馬 2、牛 43、猟銃 13 と記されている。享和元年（1801）の『西郡廻見日記』によると、江川村は上分大庄屋の下にあり、各村には庄屋がいた。新田高 194 石余、切畑 26 石余、家数 162、人数 883、牛馬 64、猟銃 30、留山 3 で、江戸中期の 18 世紀に大きく土地開発が進み、家数・人口ともに増加したことが分かる。

【中家】

押谷の茶堂

河内神社　江戸時代以前の河内大明神。中家の氏神でお祭りは夏と秋。20 年ほど前には神輿も出ていた。唄いがあって太鼓を叩いておなばれをした。

小祭り　「大日様」は牛を祀っている。近くのツキアイダバでは奉納で闘牛をやっていた。「滝ノ下組」は金比羅様をまつる（旧暦 10 月 10 日頃）。集落の大森さんの家だけの祭りもあるらしい。「田辺の権現様」というのもあって社が今もある。押谷にある「茶堂」は、春は中家、夏は押谷・中家の両方で祭りをしていた。

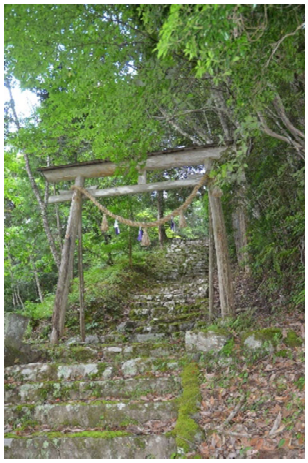
【押谷】

宿禰様　『日本書紀』などに登場する人物・武内宿禰を祀る神社。近隣の武内姓の人が集ま

宿禰様（神社）とのぼり旗

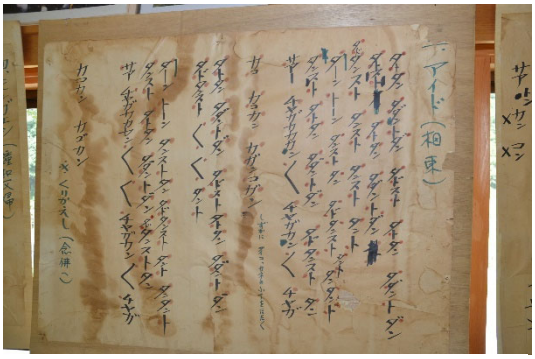
る祭りは旧５月２８日、旧１１月２８日。秋は神官さんを呼んで行う。祭りの世話は屋号「竹ノ内」など２家が世話をする。神社には、明治 42 年の武内繁太郎（勉の祖父）、大正元年の武内芳太郎（別家）の名前が書かれた「のぼり旗」があり、少なくとも明治時代から祭りは行われていた。

13 の小祭り　春と秋に行う「雨の地蔵」の祭り、お薬師さま・お釈迦さまの祭り、押谷の入り口にある茶堂の講（御大師様の時に集まる。お地蔵さんを祀っている）、水祭り（施餓鬼（せがけ）。集落に死者が出た年に行う盆供養の祭り、図８の▲で行う）、春秋の「波多臣」の祭り（茶堂で行う）、オサバイの講、五捨（ごすて）様の祭り（トヲノモトにある。牛の肥をかけたら、えらいたたりがきて人々に熱が出たという話が残っている）、山の神さまの祭り（市野々にある。当番制で注連縄とまかないをする。小さなほこらがある。大江の人も）、金比羅さまの祭り、黄幡神社（幡宮さま）の祭りなど 13 の小祭りがある。


黄幡神社の鳥居

初踊り　年の初め（旧暦正月７日）に太鼓を叩いて（おかぐらの名残）子供らを連れて黄幡神社へいく（初踊り）。祈ってもらった札（関札）を境界に立てる。境界は川平に抜ける峠、お茶堂、地吉峠など５カ所。関札は庭先の石垣の岸にも突っこんでいた（家の境界？）。

江川川で行われた水祭り（せがけ）


集会所にある念仏踊りの節

（３）生業

江戸時代の江川村の産物として、楮・茶・葛・蕨・下山弓があげられる（『土佐州郡志』）。特に戦国末期から楮を使った紙生産が盛んな地域であった。享和元年（1801）の『西郡廻見日記』には、御用紙、御用楮、御蔵紙が生産され、かなりの量が藩に納付されている。文政

水祭りの盆棚

７年（1824）には、江川村の田辺実次と東惣次を中心に住民が、紙の取り扱いの改正を藩に求めた紙一揆が起きている（『間崎文書』）。

【中家】

水路　押谷川と江川川の合流点辺りから取水するのが「東づけ水路」で、江川川東側の「小山ノハナ」「シンガイ」「渡上り」「本田」などの田が掛かり。権谷から来ている水路は「西づけ水路」という。これら水路の開削は江戸時代以降か。江川川流域は砂が多くて粘土質で乾きにくい土質。稲にはいいけど、園芸には良くないそうだ。除草剤を田んぼに入れてから、ウナギがえらい死んだ。昔は大きいウナギがいた。

田と水害　「小山のハナ」は昭和 20 年代終わりごろに川の氾濫で河原になった。昭和 39 年ごろに直して田んぼにした。

田の裏作　昔は田で米を作った後に小麦または大麦を作った。麦の収穫は４月末～5 月。米の後に菜種を植える場合もあり、菜種は実を取って農協に出すと、油（食用天ぷら油）と交換してくれていた。麦の栽培は、平成になってほとんどの家がやめた。

大豆栽培　6 月の田植えと一緒に田の畦に大豆を植えた。長い棒で穴を開けて、3 粒ずつ植える。水が入らんようにする。夏場には草を刈り、田の泥を取って株がかやらんようにする。これは子供の仕事だった。大豆は陽が当たった方がよく育つ。収穫は 10 月末。大豆は田の畦以外にも畑にも植える。1 反８畝くらい、平均 150 キロくらい取れていたのでは。大豆はみそや豆腐をつくる自家用、みそには麦も使った。

牛馬　田で使う牛は黒牛、権谷の井上大江さんという人が馬車引きをしていて馬を１頭飼っていた。荷物をひっぱり、食料品とかを買ってきていた。ばくろうは、本村や愛媛の広見の方から来ていた。

蚕栽培　養蚕も盛ん。春こうて、夏こうて、秋、晩秋と４～５回かう。生糸の長さは春が一番よかった。中家では 6 月 20 日頃が田植え、10 月末が稲刈り。繭を出荷してから田植え、田んぼの管理もほうっとって養蚕に力を入れた。桑畑の管理も重要で、除草剤をかけたり、クワデうちをしたり役がかかった。

飼育所　昭和 45 年ごろに蚕の子を２齢まで飼う「飼育所」が集落内に立った。共同飼育所で飼育して農家に分配する。20 日くらいで繭が取れる。運営は共同出資の養蚕組合で、役員が集落で今年何グラム飼うかを決めていた。飼育所には女の人が５～６人いて蚕の世話をする。昭和４０年代がピークだった。養蚕組合は本村など西土佐中の集落がやっていた。西土佐の生糸は質が良くてブランドになっていた。百貫作った人は飲み会に招待される仕組みもあったが、目方を取れない人との差別になるからとやまった。

搬出　八幡浜の「酒六（さかろく）」（織物・紡績会社）が一手に仕入れていた。酒六から技術指導者がきて、酒六を通じて愛媛の蚕糸工場に繭を出していた。集会所で集荷してトラックに積んで

持っていく。すぐに計算してその日のうちに金くれた。養蚕が下火になり酒六が取り扱いをやめると、農家も次々と養蚕をやめた。最後の方は仁淀川町の「藤くら蚕糸」に出していた。

衰退と転換　価格が下落し、蚕の病気（伝染病）の影響もあり、平成の初めごろにやまった。伝染病にかかると３齢くらいで脱皮をできなくなって、蚕を焼き捨てたこともあった。養蚕は西土佐中が一斉にやめたような印象。その頃に園芸が入ってきて養蚕から転換した。また、イモ畑から転換されていた桑畑には栗の木を植えた。

稚とり　蚕の卵は八幡浜市保内町で仕入れた。グラム単位で箱に入れて卵でくれた。

蚕霊祭（ようれい）　当時はお蚕様と呼んで、蚕が出る前（４月末～５月初め）になると、いっぱい景気づけにとお祭りをやっていた。

椎茸　山でいうたら椎茸の栽培。春から秋、指導員が回ってきて指導をしていた。

移動製材　家を建てる時などに山で移動製材をすることはあった。権谷の奥の「滝の奥」で製材をしていた。

シイノヲ山　中家の共有山があった。カヤ山で火を付けて燃やしてからカヤを取る。

ふわふわ作りの様子

豆腐作り・ふわふわ作り　豆腐を作る１日前に皮をとらずに大豆を水に付ける。冬場は 12 時間、夏場は８時間。３キロで 12 丁、400 グラムで１丁の豆腐ができる。釜でお湯を沸かしてふっとうしたら大豆を入れる。沸いてきたら「木しゃもじ」で混ぜる。にがりを入れるタイミングが難しい。温度計で 75 度くらいだが感覚。沸騰したら火を止めて袋にいれる。豆腐になる前の固まりつつある状態を「ふわふわ」と呼んで地域で食べていた。かまやの煙を見ると「ばあちゃんが豆腐作りゆう」と子供が集まってきておやつがわりに食べた。醤油を入れなくてもにがりのからい味があってそのまま食べた。大人も好きな人は食べていて、おばあさんが「ふわふわできたぞー、こいや」と呼んでいたという。

豆腐シャンプー　豆腐の残り汁は、髪を洗ったらつやつやになるというのでシャンプーの代わりに使っていた。

にがりの作り方　竹の網かごの下に陶器のすり鉢を置いて、天然の塩をいっぱい入れてこすとにがりができていた。納屋の涼しいところに置いてたらしていた。昔のにがりはききが良くて、大きなこごりができて、豆腐作るのに良かった。にがりは１升瓶に入れて保存した。

豆腐作りの道具　「しぼり袋」（さらし木綿製）、「しき布」（豆腐の底に入れる）、「型棒」「わく」（１升用、２升用、３升用）などで、木製品は大工さんが作っていた。

皿鉢の一品　豆腐を食べるのは冠婚葬祭（田植えの時、結婚式、お葬式、小祭り、夏祭りなど）の宴席で、いつもは食べさせてもらえない高級品的な感覚だった。そこで出される皿鉢

には、こんにゃく、フカ（イカ）、豆腐、鯛のお造りが載っていた。

にがらし　イカやフカにつけるのは「にがらし」のタレ。「にがらし」は愛媛でも食べれている郷土料理で、鬼がらし（辛い菜種からすって取った粉）を細かくすりつぶして、みそ、酢、酒を加えて柔らかくなるまで混ぜた甘辛い調味料。ぬるま湯であく抜きをする。愛媛の方では壺に入れて昔から「にがらしみそ」と呼ばれている。

おから料理　炒めたにんじんごぼうとおからを混ぜた料理や、ねぎとじゃこ、おからの酢和え、おからずし（いわし（魚）をひらいた中におからを入れてそのまま酢ごろしにしたもの。「いわしのほうかぶずし」とも）、かりんとう、ドーナツなどが地域で食べられている。

おこげ　昔はガスでなく薪で米も炊いていたからおこげができた。子供のころ、「おしっこを夜漏らさんけん、おこげがいい」と言われた。

【押谷】

紙漉き　だいたいの家で楮を取って紙漉きをしていた。愛媛の方へ持っていく場合が多く、吉野町にサドさんという人がいて紙を買いに来ていた。

焼畑　ソバ、キビ、イモなど焼畑を作った。山を焼いた後によくワラビをとりにいっていた。

カヤ野（畑）　村の共同所有の山（部落山）があって６～８人で組を作って、カヤを取りに行っていた。

山の仕事　山を山師が買いに来て、上木を切って材木を切り出す。搬出はきんまで引っぱって出していた。愛媛の松野町の宮岡さんが山師で、宿を貸したりしていた。炭焼きは自分の山でやっていた。

栗栽培　養蚕がいかんなった後、桑畑に栗を植えた。集落へ農協が集荷に来ていた。

カゴ作り　宇和島へ修業にいった芝さんという人がきれいなカゴを作っていた。大きなクワカゴから小さなカゴまで色んなカゴを作っていた。芝さんの散髪をしてカゴをもらった人もいた。外から人が買いにきて、自転車につけて十和へも売りにいっていた。

牛の事　田んぼで使う牛は、ばくろうが売り買いする。武内繁太郎さんはばくろうをやっていた。愛媛の鬼北町近永からもばくろうが来ていた。愛媛は黒牛で、こちらは赤牛だった。松野町では闘牛があってこちらから牛を着飾って出す人もあった。旧本村小学校の後の「根場谷」奥にもツキアイダバがあって、闘牛をしていた。こちらは愛媛とは違って牛は飾っていないが、大会みたいなものをしていた。

（４）交通・流通・娯楽[6)]

愛媛県境にある江川地区は、昔から伊予－土佐の交通の要衝あった。江戸時代には、道番所が権谷口・庭田口にあり、伊予から宇和島の商人が出入りしていた。他に山道内番所が庭田の谷入、本村の帆柱にあった（『西郡廻見日記』）。また、文政７年（1824）の間崎文書に「下山郷の内江川村地下人（中略）中村へ罷越す含みにて立越し居り申す場合、道筋竹屋敷村に於て喩し方致候」とあり、江川から中村へ出る場合、長生－藤ノ川を経由し、竹屋敷（旧

[6)] 江川地区の青年団活動については、楠瀬慶太 2013「山里のバンドブームに見る地域活性化の可能性」『地域活性研究』vol.4 に詳しくまとめている。

中村市）を通る道が取られていたことが文書から分かる。

【中家】

目切り屋さん　昔は石臼が各家に２台はあった。目切り屋さんといって摩滅した臼の目切りをする人が、家々を「石の目切りませんか」とよく回ってきていた。松野町の山下石材。１回２万５千円くらいで、チャンチャン叩いてノミで切る。

【押谷】

地吉坂（峠）　峠の平場（権谷の平）に大きな注連縄、大きな草履がかけていた。松の木があってくぐって峠を通る。

商売　旧十和村の川平の長老が鮎やウナギを売りに来ていた。焼酎は皆作っていて、愛媛の方から買いに来ていた。税務署が来ると、「収税が来た」と集落の人が焼酎瓶をかのうて走って逃げていきゆうのを見るのが子どもたちは楽しかったという。人形まわし、芝居をする人も集落に来ていた。

（五）「ふわふわ」を使った地域づくり

（１）地域と大学の連携事業

過疎高齢化が進む全国の条件不利地域では、学生の力を借りて集落再生につなげようと、大学と連携して地域活性化に取り組むケースが増えている。大学にも近年、研究機関としてだけでなく、地域づくりへの参加や地域を支える専門人材の育成、知的資源の地域社会への還元など社会貢献が求められるようになり、各分野で集落や地方公共団体、企業などとの連携事業が進んでいる。将来的な地域産業の活性化や地域の課題解決に向けて、大学が地方公共団体と連携する取り組みも展開され、大学等の地方公共団体からの受託研究実績は 2007 年には 1537 件を数え、５年間で約 500 件増加している[7)]。また、地方の大学では、地域学部地域学研究科（鳥取大学）や地域連携推進センター（金沢大学）、地域協働学部（高知大学）など地域の課題解決に取り組む学部・学科や研究所が相次いで創設されている。

高知県では、高知大学地域協働学部の創設以前から高知大学などが条件不利地域の住民と連携して活性化策を探る授業カリキュラムを用意し、教員や学生らが県内各地で取り組みを続けている。2010・2011 年度に実施された四万十市集落再生事業は、高知大学の地域連携の取り組みを知った四万十市西土佐総合支所地域企画課が高知大学地域協働教育学部門に呼び掛けて始まった取り組みである。市と大学が連携し、「地域協働入門」などの授業を受講する大学生が地域に短期間滞在しながら、2010・2011 年度に四万十市の中組地区を複数回訪れ、農業や暮らし体験などを通して地域の特産品開発に関わった。また、同地区は 2011 年３月に高知市の NPO 法人「人と地域の研究所」が行った「ふるさとインターンシップ」で県内外から大学生 4 人を受け入れ、特産品開発などに取り組んだ。ここでは、住民と大学、行政が連携し、大学生の力を借りて模索した中組地区での地域づくりの取り組みと成果を、実地調査や関係者への聞き取り調査から整理する。

[7)] 文部科学省 2008『文部科学白書』39 頁。

（２）四万十市集落再生事業の概要

大学生とふわふわを作る中組絆の会メンバー

四万十市役所は 2009 年秋、高齢化率が約 41％（2010 年国勢調査）と過疎高齢化が進む条件不利地域の西土佐地域（旧西土佐村）を大学生の若い力で活性化させようと高知大学との連携事業を構想。モデルとなる地区を選定して活性化を進め、後に他地域にも取り組みを広げる計画で市の単独事業として予算化した。

モデル地区となったのは、四万十川の支流・江川川流域の中組地区。愛媛県境に近い人口 86 人（25 戸）、高齢化率 39％の山間集落だ（2011 年度当時）。高齢化などで役員が出せず、祭りや敬老会などの地域活動を行う流域地域の分館（公民館）活動からも離脱していた地区で、学生の受け入れを通して地域づくりを進めたいという区長らの希望で選ばれた。

2010 年度は６月、11 月、２月の３回、高知大学の１、２年生が地区を訪れ、民泊しながら住民と交流。地域巡りや農作業体験、ワークショップを通して、条件不利地域の暮らしや実情を探った。１年目は住民との関係づくりが中心となり、手探りの部分も多かったが、交流を続ける中で２年目の取り組みにつながる大きな成果が得られた。地域資源を探っていた学生らが、地元の年配女性が振る舞った伝統の製法で作る豆腐料理「ふわふわ」に注目したことだ。ふわふわは、石臼で大豆をひき、「くど」に鉄鍋をかけて炭火で煮て沸騰させ、煮立って「寄って」（固まって）豆腐になる直前にすくい、しょうゆをかけて食べる料理。昔から地区の各家庭で結婚式や祭り、葬式の際などに食べられてきたほか、子どものおやつとしても人気があった。

事業２年目となる 2011 年度も学生らは年３回地区を訪問し、「不思議な食感と甘みがやみつきになる」と注目したふわふわの売り出しに着手した。10 月には、学生らが製法を知る 70～80 代の地区の女性５人から教わりレシピ作り。11 月に高知市の高知大朝倉キャンパスで開かれた学園祭「黒潮祭」の会場で、学生と住民が協力して初めての調理体験・試食会を開いてふわふわをＰＲした。

黒潮祭をきっかけに住民らは「新しいものじゃなく、地元のものが喜んでもらえる」と自信を付け、活動を活発化させる。2012 年１月には廃校利用の先進地である幡多郡黒潮町蜷川の住民グループとふわふわ作りで交流し、２月には愛媛県松山市の中心商店街で試食会を実施。３月には大学生がスタッフとして参加し、高知市のグルメイベント「土佐の食１グランプリ」にも出店するなど、県内でも知られる特産品に成長させた。

2012 年度も市の集落再生事業は継続するが、中組地区での高知大との連携は３月末で終了。大学生らは新たに同じ西土佐地域の口屋内地区に入り、休校舎利用などを考えることに

なるが、市の中組地区への支援は継続された。

中組地区の女性を中心とした住民 15 人は 2012 年４月、ふわふわの外販活動などを通して「山里から小さな産業を興そう」と住民組織「中組絆の会」を結成。県内のイベントでの外販も継続し、５月からは地域の小中学校の給食への豆腐供給も開始した。また、新たに大豆の植え付けも行い、毎月 12 日を「トーフ」の日とし、若い世代への製法の伝承を始めるなど活動を加速させた。

（３）地域資源の再発見

集落活動が停滞していた中組地区では、事業が行われたわずか２年間で住民組織が活性化した。地域の伝統食「ふわふわ」を特産品化し、学生や行政に頼らずに自分たちで販売していく組織の立ち上げまで活動を進めた。外販を通じて条件不利地域と都市部のつながりができたことも重要な成果である。事業成功のポイントはどこにあったのだろうか。

まず、大学生という外部人材が住民とは異なる視点で地域を見てその魅力を伝えたことがあげられる。学生は、住民が「当たり前」と思っていたことに魅力を感じ、地域資源となることを提示した。一方、住民も大学で地域について学んでいる学生の声に耳を傾け、ふわふわという地域資源の魅力を“再発見”したのである。大学生という地域にとって新鮮な存在は、そのことを伝えるのに大きな意味を果たしたと考えたい。学生や住民をうまくリードした大学の教員や市職員の存在も大きい。特に、地域づくりに関心のあった市職員は住民や地域をよく知っており、学生と住民の良き仲介役の役割を果たした。実際に地域づくりに加わる中で、地域と大学をつなぐ現地コーディネーターとして成長したにちがいない。

また、わずかの期間で大きな成果が出せた理由としては、中組絆の会の団結力や地区外での活動への積極性があったからだと考える。聞き取り調査から推測するに、これらはメンバーが以前に行っていたサークル活動の中で培われたものだと考えられる。活動の数年前までメンバーは、老人クラブの活動として「遊楽会」というダンスや踊りのサークルを作って活動しており、地区外の公演にも頻繁に出演していたという。中組絆の会の女性たちは若い大学生から刺激を受け、以前あった集落組織を再生させ、活動につなげたのだと考えたい。

（高橋洸貴、楠瀬慶太）

３、大宮　　北幡有数の穀倉地帯

愛媛県松野町に隣接する県境の集落で、目黒川上流に水田地帯が広がる。耕地の少ない北幡地域では有数の米所で、「大宮米」の生産が盛ん。住民株式会社「大宮産業」があり、地域活性化でも名が知れている。ここでは、文献と古老の聞き取りをもとに大宮の歴史と暮らしの記憶を報告する[8)]。

トリイノ前の田（大宮中）

（一）村の歴史

（１）集落・土地開発

江戸時代までは目黒川の上流に位置する下山郷下分に属していた大字・大宮。戦国末期の天正 17 年（1589）の『地検帳』（下山郷地検帳）には大宮名がみえ、中世から広域に土地開発が進んでいた。大宮名は極楽寺谷村・宮ノ川村・二ノ又・ヲリツキ村・宮崎村・葛原村・舟木村・足川村・中カイチ村・小ハタ村・泊ノ上村・相ノ木村・ホウノキウ・行事田村・中ノ川村・中畦村・西村・曾我村・藤ノ瀬村などで構成されていた。伊予国目黒村に隣接する大宮村は、慶長２年（1597）の『秦氏政事記』には「下山大宮口」が見え、伊予境の境目の地域であった。江戸時代には境目番所（大宮口番所）、内番所（地下人関）が置かれ、鉄砲・弓が備えられていた。伊予との境目の「境谷」（図 10）を越えると樫谷村へ一里半、松丸へ三里、吉田城下（吉田町）へ八里、宇和島へ七里の距離にあった（『西郡廻見日記』）。

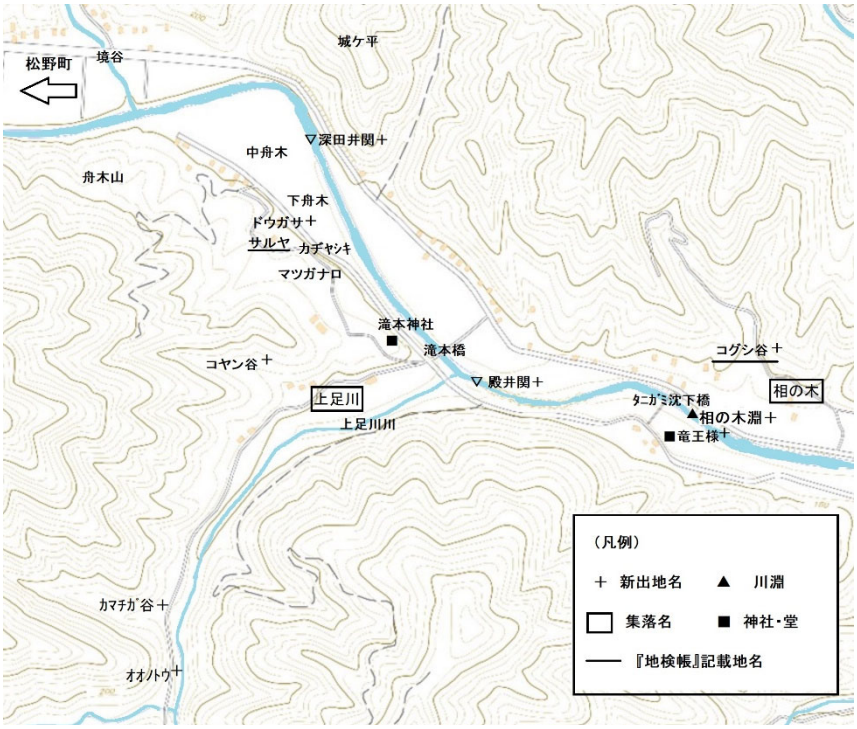


図 10　大宮上の地名地図

17 世紀末の『元禄地払帳』によると総地高 580 石余（本田高 438 石余、新田 142 石余）で、本田は藩主山内氏の蔵入地（434 石）、残りは道番（境目番所番人）・宅間伝兵衛の給地

8) 大宮中地区の浦宗準一さん（昭和３年生）、竹葉伝さんに話をうかがった。歴史については『日本歴史地名体系　高知県の地名』（平凡社）を参照にした。

および溝床損田、新田は貢物地である。江川村同様、県境地域を土佐藩が直轄地としている点は注目すべきである。18 世紀半ばの『寛保郷帳』では家数 74、人数 484、馬 87、牛 28、猟銃 10。享和元年（1801）の『西郡廻見日記』によると新田高 248 石余、家数 85、人数 506、牛馬 74、猟銃 19、留山 6、嘉永元年（1848）頃の「大庄屋手控」（『間崎文書』）には高 590 石、家数 89、人数 521 とある。大宮村では、中世の段階でかなり開発が進んでおり、江戸前期（17 世紀）に少しの開発があったのみで、それ以後は大きな開発はなく家屋や人口の増加は限られていたことが分かる。新田は貢物地となっていることから、楮などを採取する畑地の可能性もあり、水田開発の進展は後述するように近代以降に進んだようである。

（２）生業

18 世紀前半の『土佐州郡志』によると、大宮村の産物として楮・材木・薪が上げられる。良材が豊富にあり後の国有林につながる藩の直轄林（お留山）が村内に６カ所ある。目黒川両岸に山林があり、材木や薪は豊富だったのだろう。『西郡廻見日記』によると村の貢物として「御用紙」「御用楮」「御蔵紙仙過（泉花）・大半紙・小半紙」「御用蕨縄」「揃蕨」が上がる。紙、楮、ワラビの根茎で作る強度の強い蕨縄といった山資源が上がっており、広い耕地がありながらも稲作に依存しない多様な生業が行われていたことが分かる。

（二）昭和期の村の暮らし

（１） 地名

曽我石　鎌倉時代初期の武将、曽我兄弟がいたと伝わる。

モリヤ　屋号・土地の地名、もともとムロヤと言っていたがモリヤになった。

大宮神社　もとは小字「宮崎」にあったので、宮崎大明神と呼ばれていた。

陰藪　屋号・土地の地名。陰藪、ハゼノキの一帯に神田があった。

殿井関・深田井関　殿井関はトノイデともいう目黒川の井関。深田井関は、近代になってから提灯を使って水平を取りながら水路を開削した。トメガナロなどが水田になったのはほんのこないだという。上足谷川、宮ノ川など目黒川支流の谷川は水量が豊富で近世まではそこに依存していたものと推測されるが、近代に目黒川からの取水関が開削されさらに田地が広がったとそうである。

（２）集落

現在、大宮上、大宮中、大宮下の３地区に分かれている大字・大宮だが、この中には「藤の瀬」「猪の谷」「深田」「宮の川」「新改」「中ヶ市」「上足川」「船木」「留が奈路」「相の木」などの小数落名がある。

（３）戦後の青年団[9)]

戦前から各地区に青年組があり、村内に若者が集まる泊まり屋もあった。昭和 25 年(1949)、岡村俊則が大宮地区をまとめて大宮青年団を組織した（写真はいずれも浦宗準一氏提供)。上、中、下に支部があった。神社の夏秋の祭りや宵宮の神輿かつぎなどが青年団の仕事。大祭の前日、神輿をかざってこしらえて朝まで若いしが集まって飲む。四国配電（四国電力の

9) なお西土佐地域の青年団については前掲６）に詳しくまとめている。

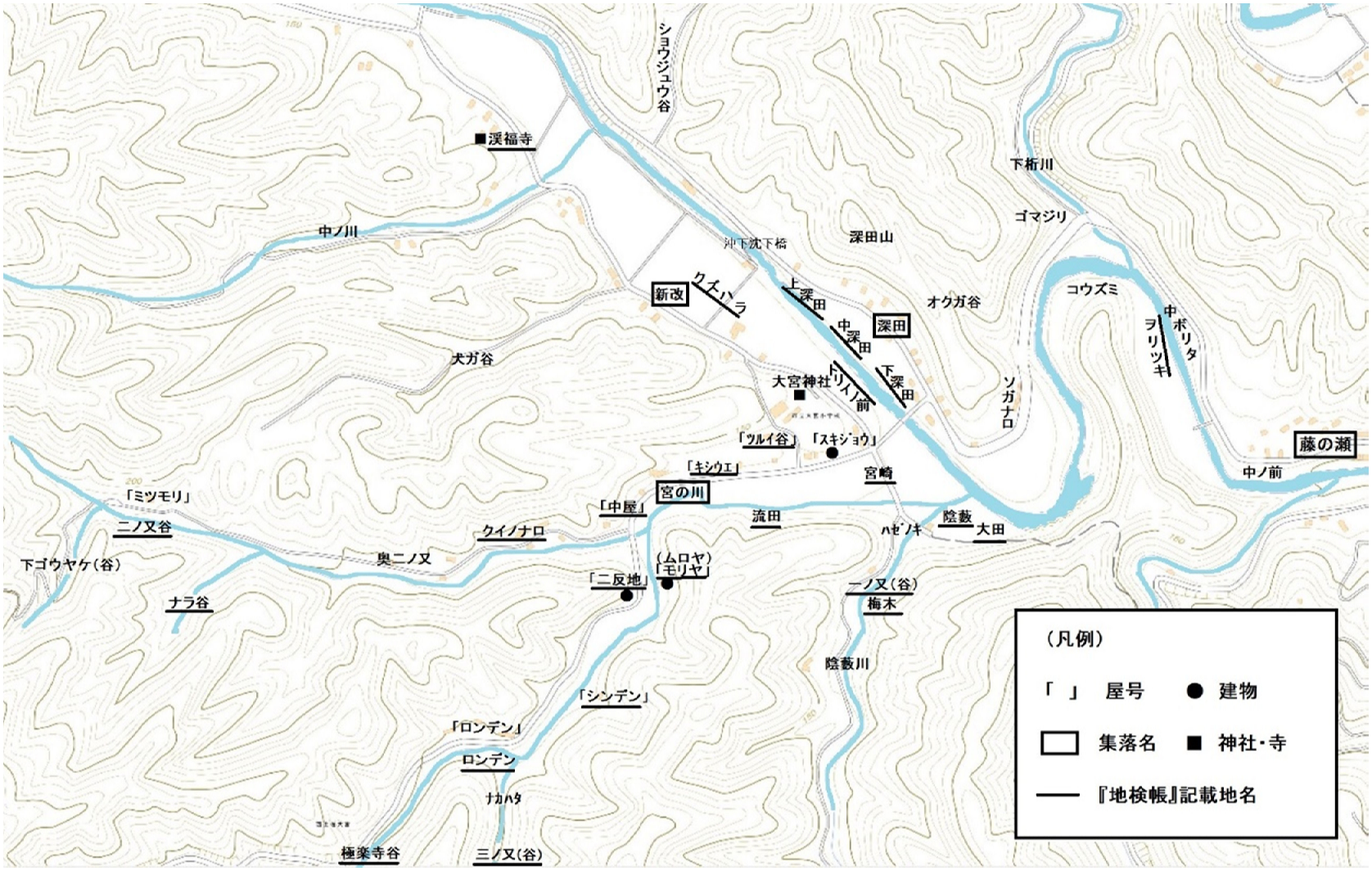


図 11　大宮中の地名地図

前身）の職員の宿舎「散宿所」が集落にあって、そこに夜集まって若い連中と集落をどうするかというのを話し合った。四国配電の岡崎盛樹さんという人が田舎芝居をしてはどうかと提案し、昭和 22 年頃から村芝居を始めた。芝居は大祭の夜にかがり火をたいてやった。中村の蕨岡の友岡さんという人（当時 50 代くらい）が演技指導をしてくれて、衣装も借してくれた。せりふ合わせは散宿所でやってその後はお宮（大宮神社）で練習した。田舎歌舞伎や人情物をやった。芝居は昭和 30 年ごろまで続け、愛媛の方まで行って公演をしたこともあった。女形はあったが、女性は基本芝居に出ずに衣装の着付をした。

大宮青年団の幹部たち（昭和 26 年 1 月）

前列右から中央が浦宗準一青年団長

（楠瀬慶太）

大宮神社での村芝居公演（昭和 24 年 4 月 13 日）

村芝居の一場面（昭和 24 年 4 月 13 日）

村芝居の衣装

（昭和 24 年 4 月 13 日）

４、小野　　国重要文化的景観の集落

国の重要文化的景観「四万十川流域の文化的景観　中流域の農山村と流通・往来」の構成要素に指定されているのが、四万十町十和地域の小野集落である。対岸の国道 381 号、予土線から台地状に広がる四万十川沿いの美しい棚田と集落を見ることができる。古老への聞き取り調査を元に、戦国末期の村の景観を復元し、昭和期の生活誌を記す[10)]。

四万十川沿いの小野集落

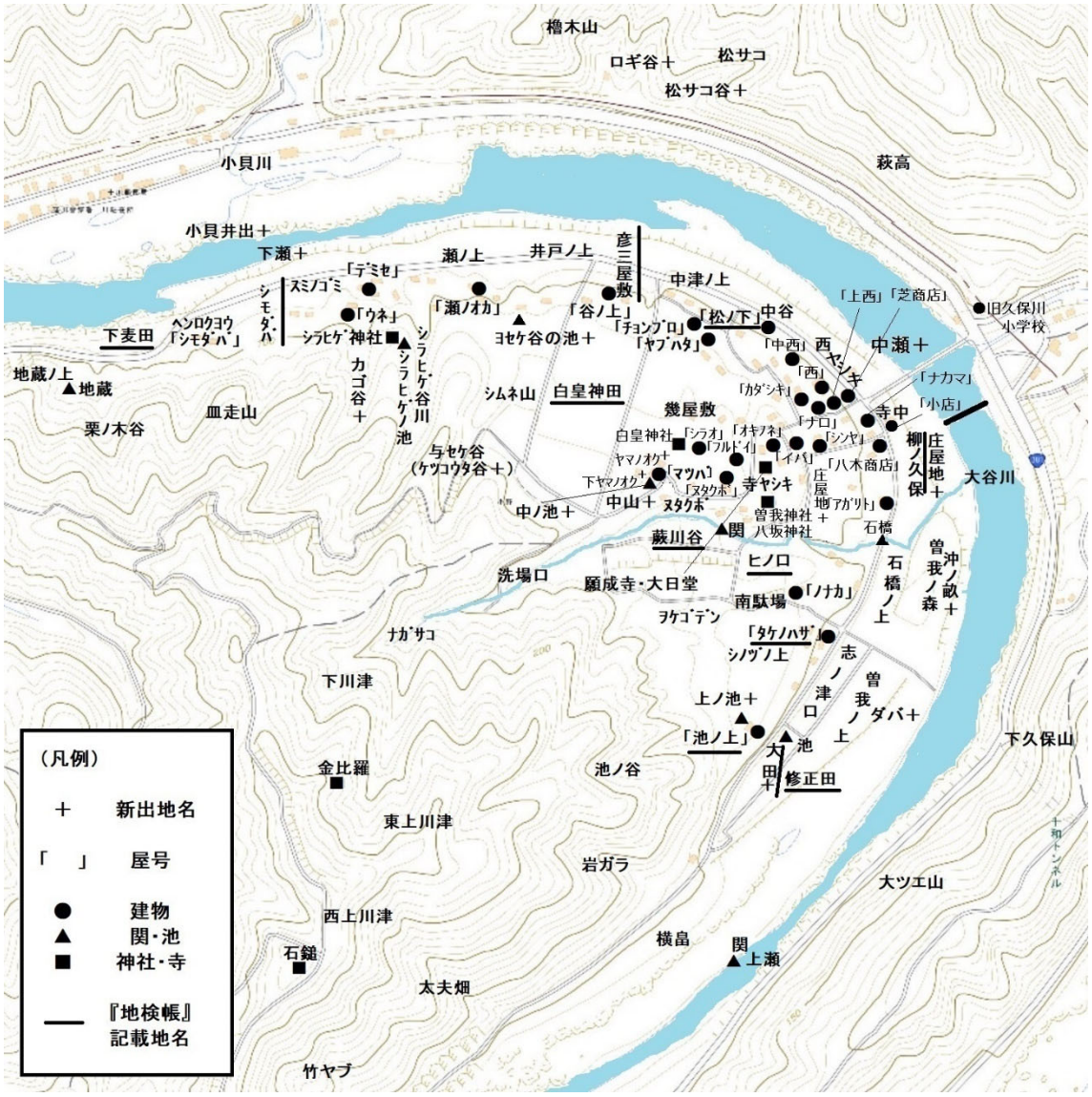


図 12　小野の地名地図

[10)] 調査は 2018 年 5 月 22 日に奥四万十山の暮らし調査団の 3 人で実施した。松下忠因さん（昭和 10 年生）らに話を伺った。

（一）『地検帳』に見る村落景観（図 12）

（１）集落

上山郷下分の一村である中世の小野村は、慶長２年（1597）の『地検帳』（上山郷地検帳）では江戸時代の小野村のほか細々・大道・窪川・ホキ・鮎古・柳瀬・井崎の諸村を含んでいた。現在の大字・小野にあたる小野村を見ると、屋敷地は「ワラヒ川谷」１軒、「ヒノクチ」2 軒（名本ヤシキ）、「寺中」（4 軒＋願成寺）、「下ウ子」１軒、「彦三ヤシキ」3 軒の計 11 軒である。ヤシキの間に畠が見られ、集落は散居的な景観をしていたと推測される。

（２）土地開発・水利

『地検帳』に見える田地は西から「修正田」（16 筆）「イケノ上」（3 筆）「竹ノソナ」（4 筆）「ワラヒ川谷」（7 筆）「ヒノクチ」（4 筆）「寺中」（2 筆）「下ウネ」（7 筆）「彦三ヤシキ」（3 筆）「ケツカウタ」（5 筆）「□々□ノ上」（1 筆）「タハタ谷」（２筆）「下タハ」（1 筆）「スケサハ」（１筆）「下ハサ」（１筆）「山麦タ」（１筆）「コウコ谷」（２筆）である。集落の西側の田は水量の多い蕨川谷からの利水である。「ワラヒ川谷」「ヒノクチ」など谷沿いの谷田のほか、池と谷の水を利用した「修正田」など谷の開口部にも水田が広がっている。中央や東側は、与セケ谷やシラヒゲ谷など小谷の水を利用したと考えられる。現在多くの棚田が広がる中央部の白皇神田は『地検帳』の「下ウネ」に比定され、１代～１反の小さな棚田があったと推定されるが、利水の問題で小規模な開発しか行われていなかった。山裾には切畑、田の間には畠が多数散在している。

（二）昭和期の村の暮らし

（１）地名

通称「島」（曽我ノ森）

屋号　ほとんどの家に屋号がある。いわれのある屋号を上げると、「デミセ」（書店）、「瀬ノオカ」（船大工）、「チョンゴロ」（意味はよく分からないが、家から古い着物が出てきたという話がある）、「ヤブノハタ」（近くの川に藪があった）、「シラオ」（白皇神社の側）、「マツバ」（昔はマトバと言っていた。松の下から弓を引いていたという話がある）、「ヌタクボ」（もう１軒裏にも昔は家があった、猪がヌタ打ちよった）、「沖ノネ」（四万十川沿いの通称「島」（曽我ノ森）に家があったが水害で上がってきた）、「フルドイ」（名本の家）、「イバ」（射場があった）、「ナカマ」（みんなで集まった所だから仲間）、「シンヤ」（新家）、「アガリト」（船よけの意味か）がある。

カゴ谷　水がなくてザルだからカゴ谷。

与セガ（ケ）谷　谷奥でも田んぼをつくっていた。

山ノ奥谷　普段水はあまりないが、ウナギは住んでいた。

下山ノ奥　補助整備で田はなくなった。谷の両側に田んぼがあった。昔は周辺には下山ノ奥あたりにしか田んぼはなかった。

大田　池の下にあった田んぼ。昔は深田で牛も入れんほど深かった。牛の腹が浸かるくらい。

龍がいた池　大田にある池。龍がいたと伝わる。水を取る池ではない。

ダバ　部落の共有地で草刈り場。カヤがあったが、焼いたりはしていない。黒牛をつないで飼って放牧地になっていた。戦後すぐには５～６匹を放牧していた。２町分あり今も出役で草刈りをする。時々水に浸かる。かつてはキャンプ場、ゲートボール場になっていた。

石橋　広い石橋があった。今の本道は昭和 25・26 年（1945・46）頃に掘られた道路。今の道路の下にも畑のふちを通る道があった。今の道路より上に昔の往還はあった。

庄屋地（しょうやぢ）　庄屋さんが管理していた土地。田んぼでワラビコ（蕨川谷）から取水していた。

瀬淵　四万十川には「上瀬」「中瀬」「下瀬」がある。上瀬と下瀬は漁業組合も別。石垣を積むのに石を割って無くなったが、「中ゾウ」「コカイ（瀬）」もあった。

松サコ　ロギ谷山・松サコには松の木がいっぱいあった。谷下へ落として出した。

（２）集落・土地開発

江戸時代は現在の大字・小野と同じ領域が小野村と呼ばれた。18 世紀半ばの『寛保郷帳』では家数 46、人数 259、馬 10、猟銃 7、享和元年（1801）の『西郡廻見日記』では家数 45、人数 235、牛馬 20、留山１、猟銃３となっており、11 軒から急増している。19 世紀初頭の新田高 105 石余（『西郡廻見日記』）に対し、戦国末期の本田高は 122 石（『元禄郷帳』）で水田は江戸時代を通して２倍に増えている。また、『西郡廻見日記』には「御用紙」「御用楮」「御蔵紙」が貢物として記されており、これら楮の採集と紙生産が盛んになったことも集落拡大の要因になったと推測される。近代に入っても戸数は増加し、戦前には 66 戸。昭和 50 年代後半には 84 戸まで増えているが、現在は 70 戸まで減少している。

古老の話では、戦前田んぼは少なく、谷の水と「シラヒゲの池」「ヨヤガ谷の池」「ナカノ池」（昭和 12 年（1943）ごろについた大きな灌漑池）、「上ノ池」（大田から下の田んぼに給水）の４池から水を引いて米を作っていたという。徐々に石垣をついて棚田にしていった。

集落は「上組」「中組」「共栄（きょうえい）」「庄屋組」。「共栄」は「下組」とも言う。部落会で提案されて付けられた名前。集落には鍛冶屋はなかった。外から来た人が１軒製材をやっていた。店は小野大橋の近くに「芝の小店」「八木商店」「芝商店」の３軒あった。

（３）宗教

地蔵の祭り　地蔵ノ上にお地蔵さんがある。向かいの十川と一緒に 8 月 24 日に川鎮めの祭りをする。昔は十川の人も一緒に集まり酒を飲んだ。

曽我神社・八坂神社の祭り　曽我神社（元宗我大明神）の祭礼は 7 月 20 日と 11 月 20 日。同じ敷地にある八坂神社（元祇園社）とお祭りする日は同じ。集落の全員が両方の氏子でもある。2017 年は別の日に祭りをした。八坂神社は元々11 月 21

曽我神社脇の牛鬼骨組みと出場札

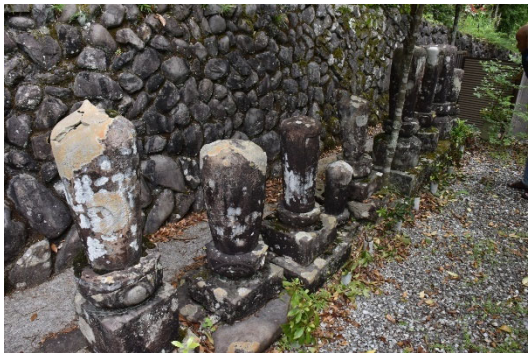
日が祭礼日。曽我神社の祭りでは花取り踊りを踊る。曽我神社は「宮地」（曽我ノ森か？）にあったが水害で流されて上がってきた。曽我神社の脇に牛鬼の骨組みがある。出場札が掛けられていて「昭和●年」に鏡川祭（高知市）と四万十川祭に出馬したことが墨書で記されている。

天日八幡の祭り　1815 年の『南路志』には「天日神」とある。旧暦 8 月 15 日が祭礼日。子供相撲がある、昔は大人も相撲をやっていた。

願成寺　元は旧大正町田野々の五松寺末寺で『地検帳』にも願成寺が見える。明治４年（1871）に廃仏毀釈で廃寺となるが、明治 13 年に再興。鎌倉初期の武士・曽我兄弟の位牌（明治 34 年（1901））が残されているが、寺や曽我神社との関係は不明。寺の敷地に大日堂、住職のものとみられる宝塔群もある。宝塔の間に中世の五輪塔の水輪が１基転がっている。

曽我兄弟の位牌

大日堂



宝塔群

他の神々　集落では他にも「山神」「シラヒゲ様」（シラヒゲ神社）「金比羅さん」「白皇さま」（白皇神社、敷地内にシイなど色々な木が生えていた）を祀っている。

（４）生業

キビが主食　昔は田んぼが少なく米がないのでキビが主食。米は店で買ってきていた。田の畦には青大豆を植えていた。圃場整備が行われたのは昭和 60 年代から。昭和 63 年、平成元年、同２年とやった。

畑　昔は多くがキビ畑。キビを食べて育った。畑にはサツマイモ、麦、大豆、小豆も植えた。

焼畑　切畑はほとんどやっていなかった。昭和初期の生まれの人は少しだけ火入れをして焼畑をした記憶がある。ミツマタやガンピは作っていない。

紙漉き　楮は野原に生えていた。集落には紙漉きが多かった。十川の南さんが楮を買い付けて（仲買）、20 人くらい人を雇ってセンカ紙（がみ）を作っていた。紙漉きと出稼ぎ、山仕事をする人がほとんどだった。

白皇神田の棚田

牛馬　馬は見たことない。牛の売り買いをするばくろうは小野にもいたが、愛媛からも来ていた。

山は林　山にはクヌギ（ナバ（椎茸の原木））、ナラナバ（椎茸の原木）、シイの木、カシの木が生えていた。大きな松の木は切って売っていた。

山師　戦後すぐの頃、小野にも山師がいて、裏山を切って集材をしていた。木を切った後に松の木を植えたが、今は松食い虫でやられている。

養蚕　蚕は本格的にやった人が何人かいる。桑も作っていた。

炭焼き　集落で炭焼きをやっている人もいた。窯跡が今も山の中にある。

（５）交通・流通・娯楽

筏流し　戦前には小野にも筏師がたくさんいた。筏が着くのは久保川側で小野の人もそちらから乗る。５つくらい丸太の筏を連結させて流していた。

竹の浮橋　沈下橋がある場所に昔は孟宗竹を束にした浮橋があった。地元の芝さんの発案だった。橋は水で流れることがあった。何回か木橋になってそれから沈下橋ができた。

船渡し　沈下橋ができる前は、船渡しがあった。部落の出役で持ちまわりで各家 1 人、全戸で回した。外の人が乗る時は 10 円くらい払ってもらっていた。船は漕いで渡した。対岸の久保川小学校の児童は大水が出て川を渡れない時は、お寺の裏の公会堂で自習をしていた。

川魚　四万十川にいた魚はウナギ、ハヤンボ、イダ。カワエビは多少取ったが、ツガニはあまり取らない。鮎は川舟にのって鮎掛けをして販売していた。鮎を捕って仕事になった

四万十川　川は地形的に変わっていない。水量も変わっていない、むしろ多いくらい。

セキ番　昔はセキ（ヤナ）を川に掛けて魚を取った。2 人でやる。組合に入っている人で捕る順番を決めた。「セキ番」という番人がいて取れた魚をみんなで分けた。大きなウナギも入っていた。販売するというより、皆で分けるだけのものだった。

青年団　地元の青年団で地芝居をやっていた。西畑人形芝居が来て公会堂で 1 日公演をしたこともあった。

災害　明治８年（1875）生まれのおばあさんが明治 23 年（1890）の水害の話をしていた。川を馬が流れゆうのを見た。お寺の下まで水が来たという話をしていた。

（楠瀬慶太）

５、下津井　　材木搬出の一大拠点

四万十川の支流・梼原川流域に位置し、梼原町、愛媛県鬼北町に隣接し境界の村。良材に恵まれ、近世・近代と材木搬出の一大拠点となった。古老への聞き取り調査から、戦国末期の『地検帳』や江戸時代の藩有林管理を記録した『下津井御留山文書』（以下『留山文書』）に登場する山や田の小地名を現地比定しながら、村の歴史的景観と生活誌を読み解く[11)]。

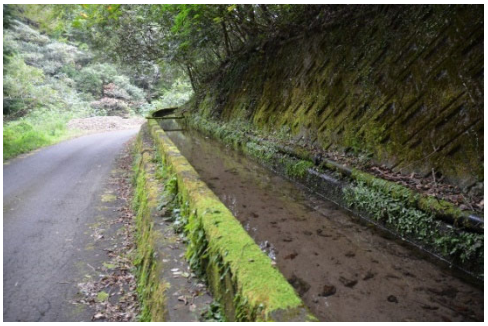
フロノ谷の田

（一）『地検帳』に見る村落景観（図 13・14・15）

（１）集落

慶長２年（1597）の『地検帳』（上山郷地検帳）に見える下津井村の検地面積は 10 町 9 反余。土地は全て「上山分」となっており、上山氏の支配下にあった。屋敷地を見てみると、検地順に「ケトウソウ」１軒、「大のの上」７軒、「ヲンチ」３軒、「サウトウ」１軒、「寺中」（西源寺）１軒、「キシノ下クカやしき」１軒、「キシ」２軒、「クイノ窪ノ上」１軒、「柳ノクホ」２軒、「仁井田神田」１軒、「竹ノチ」３軒、「ソウカイ」１軒、「舟ノセ」１軒の計 25 軒である。「大のの上」の屋敷には下津井集落の「中山」西南部に現在も屋号として残る「カマノクボ」の地名が見られるが、屋号は移動するケースがあることから、検地順から小字「土居屋敷」などがある「中山」の東部に比定したい。「キシ」は小字「フロノ谷」がある周辺、「仁井田神田」は小字「シモムカイ」にある「神田」に比定する。このように見ていくと下津井中心部では、「中山」の山裾とその向かい（「ソヲドウ」「神田」）に屋敷地があり、家数は少ないが戦国末期の段階で現在と似た集落景観を有していたことが分かる。「ゲトウゾウ」「竹ノチ」「ソウカイ」「舟ノセ」にも屋敷地が開かれている。

竹ノチの集落



集落を走る用水路

（２）土地開発・水利

『地検帳』を見ると、下津井集落中心部では「中山」を囲むように水田が多く分布してい

11) 聞き取り調査は 2016 年 2 月 2 日に奥四万十山の暮らし調査団２人で実施した。森勝さん（昭和 12 年生）、森洋子さん（昭和 16 年生）、那須富美子さん（昭和 2 年生）に話を伺った。下津井の地名地図は調査した全てを整理できていないため、今後報告書等で公表したい。

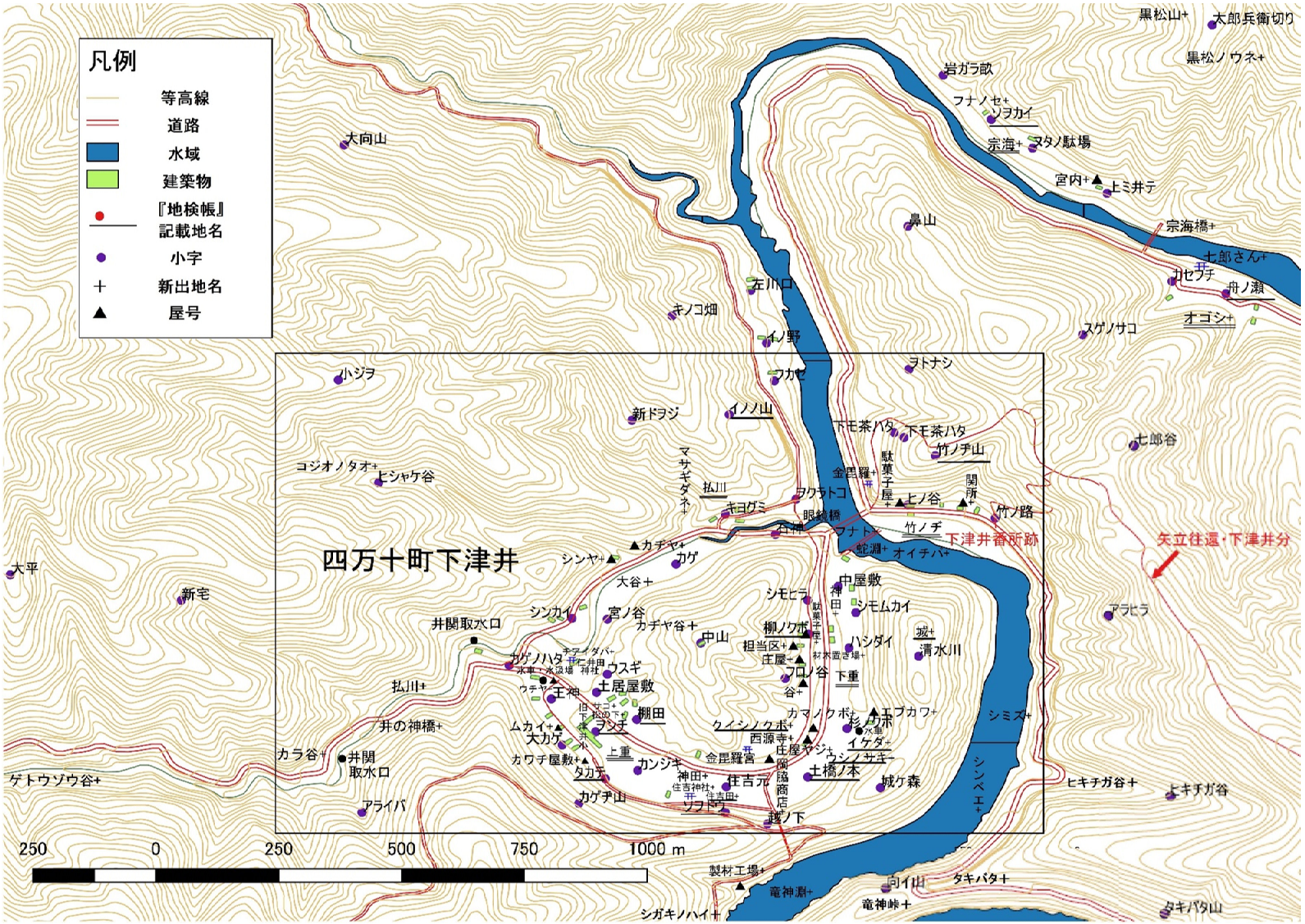


図１３　下津井の地名地図（広域）

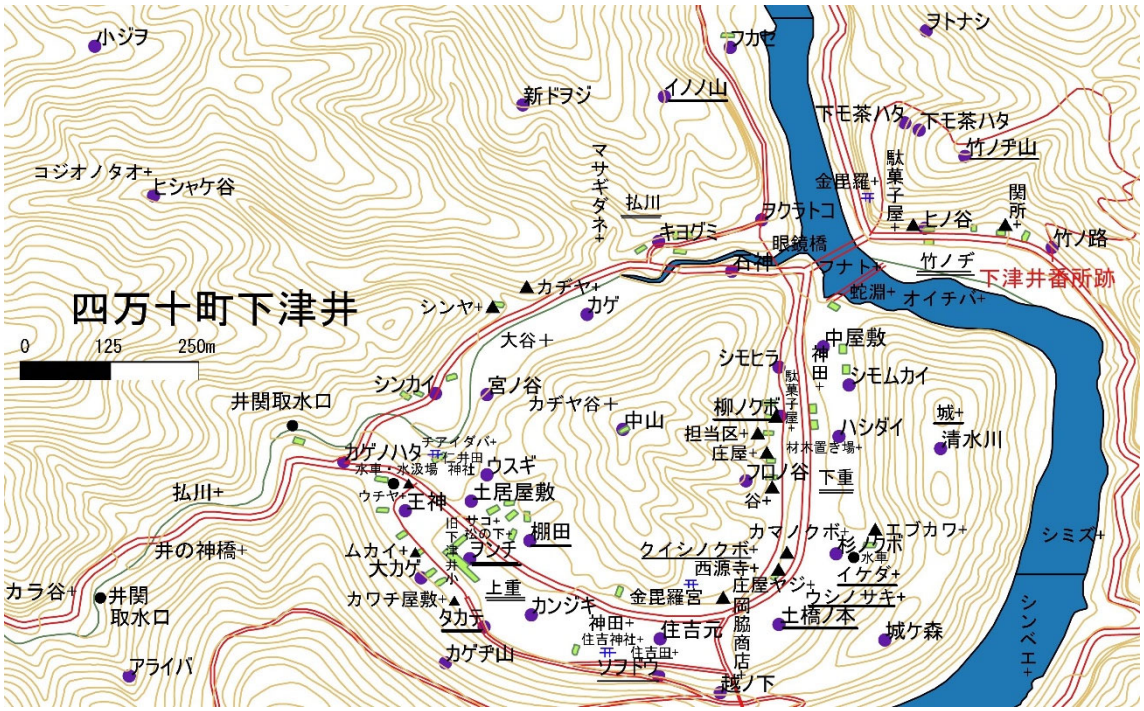


図 14　下津井の地名地図（中央部拡大）

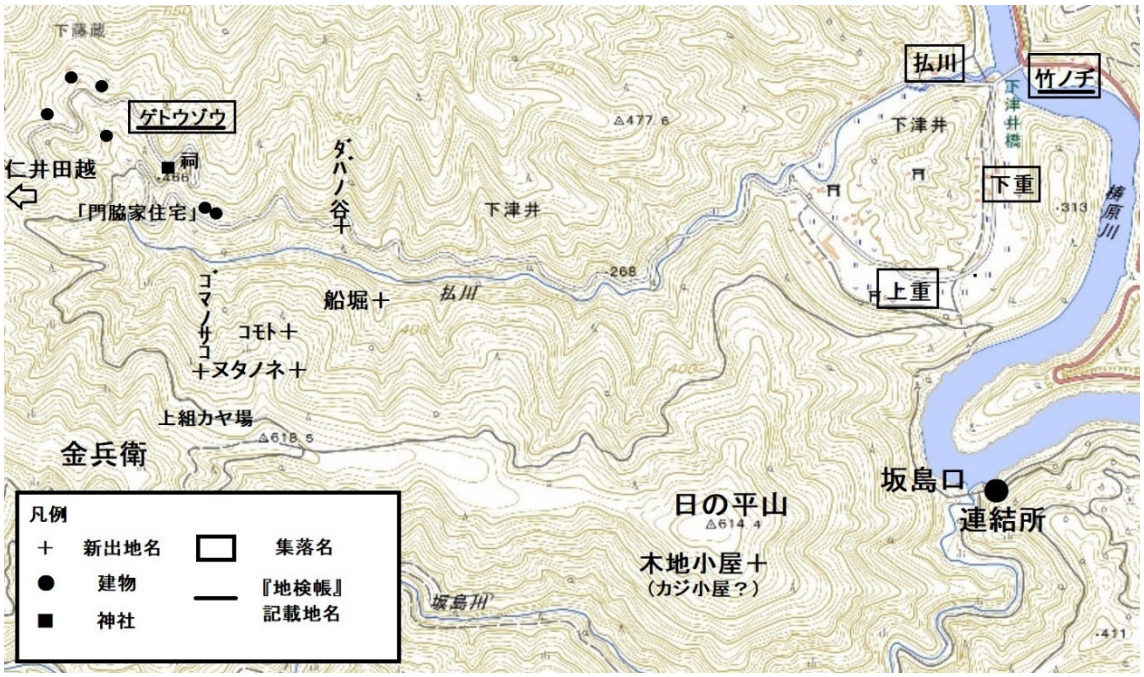


図 15　下津井の地名地図（西部）

る。水量の豊富なゲトウゾウ谷から近い東部の「大のの」「ヲンチ」などには上田、中田が多い。小字「棚田」に比定できる「住吉デンノ上タナタ」の表記が見られ、これらは棚田の形状をしていたことが推測される。多くは小谷沿いの谷田と推測されるが、田地が多く復元は難しい。田の上や間には、切畑、畠地も見られる。

（二）昭和期の村の暮らし

（１）地名

払川山　東「釣場之大畝」南「大谷川」西「駄場ノ谷」北「佐川御留山境大畝」(『留山文書』寛政五年十二月廿五日「覚」) を四至とする山。藩有の御留山でなく村管理の山のようだが、伐採等の許可は藩に提出している。現地比定からおおよその境界が推測できる (図 13･15)。

坂島御留山　東「本モ谷」南「下道村御留山境峯」西「四手村御留山」北「カヂ木屋畝」(『留山文書』文政六年九月廿三日「覚」) を四至とする御留山。「本モ谷」は「坂島谷」、「四手村」は旧大正村の「四手村」、「カヂ木屋」は聞き取りで分かった「木地小屋」に比定できる (図 15)。他にも佐川御留山、足川御留山、大松ケ畝御留山、大下野御留山など下津井村管理の藩有林が『留山文書』に見える。

土橋ノ元　湿田、昔は橋があった。通称ユダケとも呼ばれていた。

神田　しんでん。集落に下津井前（１反くらい)、住吉神社の近く（３反)、下津井小学校の近く（３畝）の３カ所。娘たちはお田植えにもいった。

竹ノヂ　オキに竹ヤブがあって段々の田んぼがあった。昭和 19 年ダムの建設で沈んだ。

天神　おはつさんというおばあさんがいてお菓子なんかを売っていた。歯が痛い時に封じてもらった (祈祷)。

五葉のハナ（ウネ）　畝が途中できれている。尻無ノウネ、クイノクボは聞いたことがあるが、場所が分からない。船堀はワラビを堀りにいったりする谷で、カヤを取りにいく途中の場所の地名。ヌタノネの近くをコモトともいった。

大田尾　オオタオは山の一番高い所を言う。

町境　昔、下津井に区長をやる人がいなくて椿原町の松原から区長を雇ったら、そのまま町境を松原に取られた。火を焚いて炭を堺に置いて、境の証拠にした。

庄屋の墓　お茶堂の上にある。城ケ森の上にも墓石、四角い墓がある

タキバタ山　竜神峠の近くにある。

シガキノハイ（エ）　シシガキ、猪がここから上がってくる。下にも田んぼがあった。

ドテ　下津井ヘルスセンターの横の川をドテと呼んでいた。

連絡所（坂島口）　職員が一人いて、森林軌道のトロッコを切り替える役をしていた。トロッコは一番後ろに客車があった。

ヒサラ川　下道の堺、営林署のヤジ（建物）があった。

若宮神社　那須さんの家が、家の中で祀っている。

水汲み場、水車　那須家の前に飲み水の汲み場があった。谷の水は冬には凍るので近くの７、８軒がここの水をくんでかろうていった。水汲み場の近くには水車もあった。

カラ谷　よく崩壊する谷。上には松茸が生えている。

（２）集落・宗教

18 世紀半ばの『寛保郷帳』では下津井村の家数 40、人数 147、馬 4、牛 5、猟銃 4、享和元年（1801）の『西郡廻見日記』では家数 33、人数 224、馬 26、牛 6、猟銃 25、井関 4、留

山 7 となっており、家数は減っているが人口が増えている。『地検帳』段階の本田高は 109 石余（『元禄郷帳』）、『地検帳』以後に開発された新田高は 33 石（『西郡廻見日記』）で土地開発は江戸時代を通してほとんど進んでいない。

現在の集落は、上組（上重、払川、ゲトウゾウ）と下組（下重、竹ノ地、宗海、尾越（おごし））に分かれる。昭和 32 年（1957）には 75 戸で、昭和 30 年代がピーク。現在は 34 戸約 60 人まで減っている。昔ゲトウゾウには５軒の家があり、「カラ谷」「カジヤノサコ」「センゲンタビ」（千間滝）の地名がある。「お大師さんの祠」「地蔵さま」（旧３月 21 日に祭りをする）もあった。道が広くなり、集落には誰もいなくなった。

森家の家印

屋号　屋号のある家が多い。「エブカワ」「シンヤ」「カンジャ」（昔鍛治屋だった）「谷」「庄屋」「ショウヤヤジ」「関所」（番所とも。江戸時代に下津井口番所が置かれていた）などがある。記号を使った家印屋号も森家や浜渦家にはある。

浜渦家の家印

西村旅館　竹ノヂ。鮎かけさんが泊まりにくる。宿屋だけでなく、鮎をとって取引をしていた。ウナギをカンでとって商売もしていた。

担当区　「庄屋」の隣に営林署の担当区事務所があって、その下が営林署の材木置き場だった。個人経営の製材所もあった。荷物を運ぶリアカー引きの人もいた。

ワラビ粉のウチヤ　ワラビを漬けるための「ウチヤ」（打屋小屋）が集落にあった。上重の６・７軒が使っていた。ウチヤでの作業は、ワラビの根を取ってきて洗い、大きな石の上を置いてたたく。汁をこして、大きな桶に入れて、灰を入れて沈殿させる。ワラビコ（粉）にする。朝４時くらいから起きて作業をしていた。番笠に入れて十川へ持っていき、伊万里さんという大阪の商人に売っていた。

仁井田神社と牛鬼

社寺　神社や寺は、『地検帳』に記された「西源寺」のほか、文化 12 年（1815）の『南路志』に仁井田大明神（現仁井田神社）・住吉大明神・河内大明神・若宮・天神が記されている。また『西郡廻見日記』には、伊予境の地蔵森に大道村の者が建てた地蔵堂があり、祭日には伊予からも参拝者があると書かれている。

西源寺　曹洞宗の寺院。フロノクボという。喉のことを風呂という。それを切る、悪いことをしてフロを飛ばすとかいう。谷はフロノ谷。すぐ下に町指定文化財の茶堂もある。

下津井の茶堂

金比羅　元は宗海に金比羅さんがあったが、現在は竹ノ地に移してきている。

（３）生業

カヤ場　屋根葺き用のカヤを採るカヤ山（場）には

ゼンマイ、ワラビなど山菜が生えていた。2 月終わりから３月に皆で焼きにいって、上のふちから火を付けて火道をぐるりとして焼く。おおかた一日かけて作業して男も女も参加する。稲刈りが終わって 11 月くらいに来年はどこの家を葺くか決める。その頃に皆で家を葺きにいく。カヤはカヤ場で刈ってからハチワにして下ろして、家を葺く所へ持って行く。上組のカヤ場は金兵衛と大向山の２カ所。村の共有地になって組合を作って作業した。下組のカヤ場は「ヒキチガ谷」「大向山」にあった。

眼鏡橋から下重へつながる森林軌道跡

用水　井の神橋の上から井手（セキ）を引いている。田役の時は、赤土を担って土手をぺったんぺったん叩きつけて補強していた。

田畑　戦前は米麦の二毛作。田は１軒によくあって４、５反　食用がようよう。戦後は畑にも麦を植えた。畑にはキビ、カライモ、いずれも自給用だった。焼畑は下津井ではあまりやっていなかった。

山の仕事　国有林を借り上げて植林をした。女の人も植え付けにいった。椎茸で生計を立てた。年間椎茸で 500 万くらいの収入があった時期もあった。炭焼きは自分の山でやるほか、戦前は国有林の伐採した後木を焼きに外から人が来ていた。終戦後も炭焼きがたくさん営林署にも入った。

牛馬　田の耕作には、牛を使う人と馬を使う人がいたが、牛が多かった。えさの草は、各所（例えば「城ガ森」）に自分とこの草場があった。集落に那須林之助という獣医がいて、牛馬の具合が悪いといったら大道など地域外にも行っていた。薬を調合しては持って行っていた。ばくろうもしていた。チアイダバには牛・馬の蹄鉄を打つところがあった。

（３）交通・流通・娯楽

板橋　梼原川には蛇かごをくんで竹で橋台にした板橋がかかっていた。

仁井田越　奥大道を経て十川の町へ買物にいく。ゲトウゾウから山越え（仁井田越）でワラビ粉を持って行き、十川の町で生活雑貨を仕入れた。仁井田神社が宇和島－十川と越えてきて勧請されたから仁井田越という。田野々へ行くよりかこの道を使うことが多かった。行商人も仁井田越で来ていた。お祭りにも十川からこの道を使って人が来ていた。昔はリアカーも通らないくらいの道だったが、村会議員の北村磯次さんが主導して道を付けた。

行商　人形回し、偽物の反物売り、ひじきうり（おばあさんが愛媛から）が来ていた。

芝のブレーキ　お祭りの時、太夫さんは久保川口から自転車で来ていた。帰る時は自転車の後に切った芝を付けてひっぱってブレーキ（おもり）代わりにしていた。

アイスクリーム売り　田野々から自転車でアイスクリーム屋さんが来ていた。１本５円で買えて、黄色・ピンクなどがあった。かき氷みたいなもので、「カランカラン　アイスクリーム　アイスクリーム」と売りに来ていた。

（楠瀬慶太）

６、金上野（きんじょうの）　　仁井田庄の一村

ミコノ川の水田

吉見川の上流部にある集落で、窪川から佐賀へ抜ける国道 56 号沿いに位置する金上野。窪川の町に近く住宅地と農地が混在する現在の景観から遡って、村の歴史的景観や暮らしを探ってみよう[12)]。

（一）『地検帳』に見る村落景観（図 16･17）

（１）集落

「仁井田郷談」（『南路志』所収）には、仁井田（にいだ）庄窪川郷 13 村の一つと記されている金上野村。九条家の庄園・幡多庄内の仁井田郷に含まれ、土佐清水の金剛福寺供養奉加米を幡多庄に課した正安 2 年（1302）の「政所下文」に「仁井田参斛五斗」と記されている（『金剛福寺文書』）。また、応安 4 年（1371）に比定される『長福寺文書』には「土佐国幡多庄仁井田村」と記されている。幡多庄は一条氏に伝領され、幡多郡の中村に下向した土佐一条氏の高岡郡進出の足がかりになっていく。天正 17 年（1589）の『地検帳』（仁井田之郷地検帳）では、一反余の西原分を除けば土地は全て窪川分となっており、仁井田五人衆と呼ばれる有力武士の窪川氏の支配下にあった。金上野本村と成川（なるかわ）、ミコノ川村の３地域に分かれている。

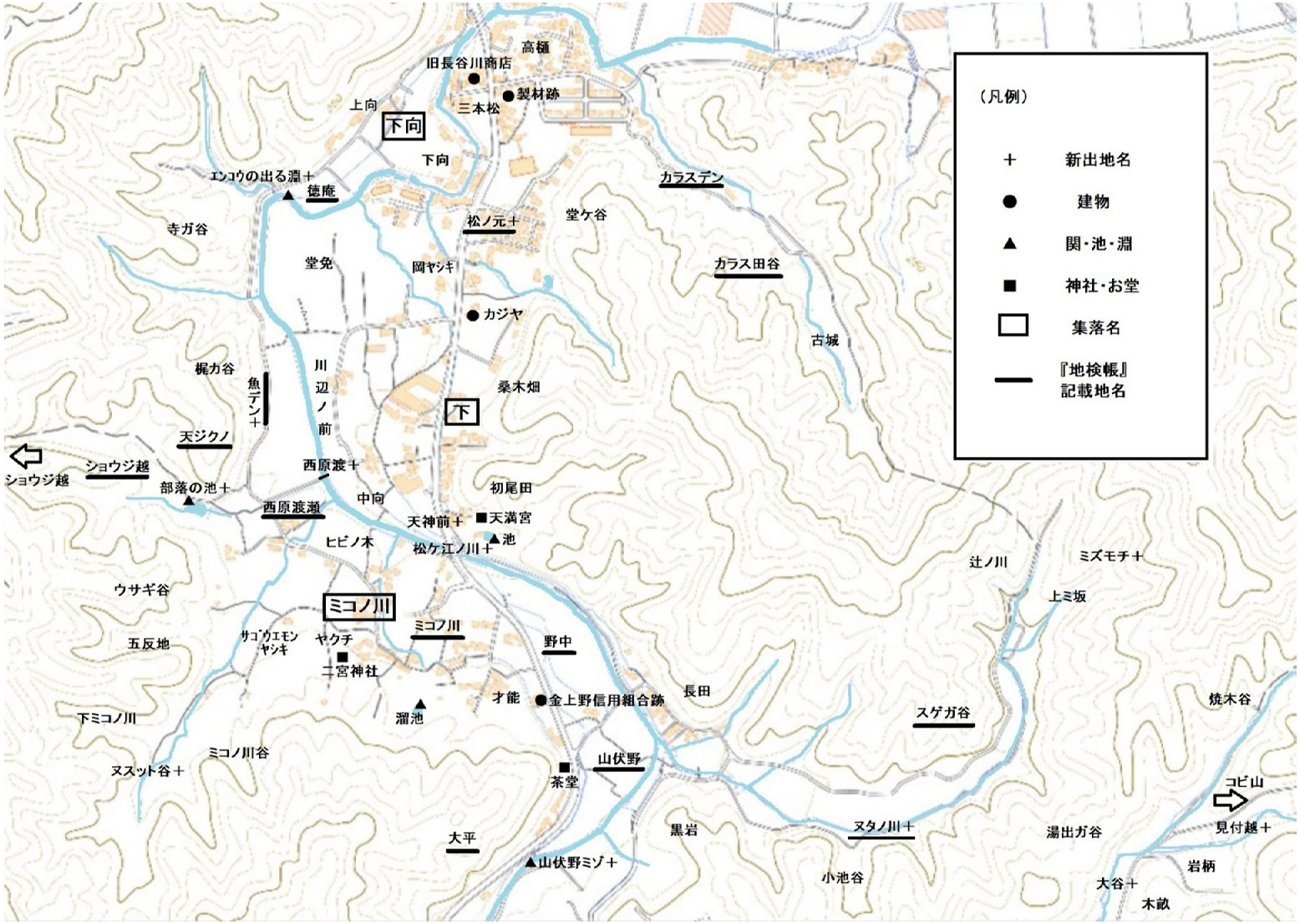
屋敷地を見ると、南から「鍛治屋口」１軒、「井ホリ」１軒、「シモハセカセウチ」１軒、「岡ハナ」１軒、「ミコノ川」１軒、「西ヤシキ」１軒、「タタサキ」１軒、「マツノモト」５軒、「藤村ヤシキ」１軒、「藤村タ」１軒、「岡ノヤシキ」２軒、「カラステ」１軒、「リヤウヤシキ」１軒、「徳雲庵寺中」２軒、「ニイヤヤシキ」１軒の 21 軒である。地名の現地比定から位置を確認すると、「成川」に４軒、「ミコノ川」１軒、「松ノ元」周辺に 11 軒、「下向」４軒、「カラステ」１軒という５つの集落域が見えてくる。特に現在も集落の中心があり宅地化している「松ノ元」は家屋が集まり、集村化している状況が確認できる。「松ノ元道懸テ」の表記から現在の国道とほぼ同じ位置に道が走っていたことが分かる。「下向」の「徳雲庵」は寺中であるが、江戸時代には退転し、現在跡地に地蔵堂がある

（２）土地開発・水利

地名の現地比定が不十分で断片的にしか分からないが、南側では「ニイヤタ」「ツツラカ谷」「ヲシ川」といった小谷沿いの谷田、成川の大谷沿いの「上横田」「左衛門九良サイノウ」「井ホリ」の谷田、大谷開口部の「岡ハナ」「鍛治屋口」といった田が開けている状況が確認できる。北部でも小規模な「谷田」が開発されている。水量の多いヌタノ川沿いの「ヌタノ川」「スゲノ谷」、カラス田谷沿いの「カラステ」、ミコノ川の「ミコノ川ノヲク」、小谷の開口部の「大平」「セウシコエ」「魚テン」などである。平地部の「ノナカ」「山フシノ」など低地部の田の利水は不明である。いずれにしても、戦国末期の段階ではまだ谷田がほとん

12) 聞き取り調査は 2016 年 3 月 7 日に奥四万十山の暮らし調査団の 3 人で実施した。長谷川安夫さん（昭和 27 年生）、植村さん（大正 15 年生）らに話を伺った。

図１６　金上野の地名地図（北部）



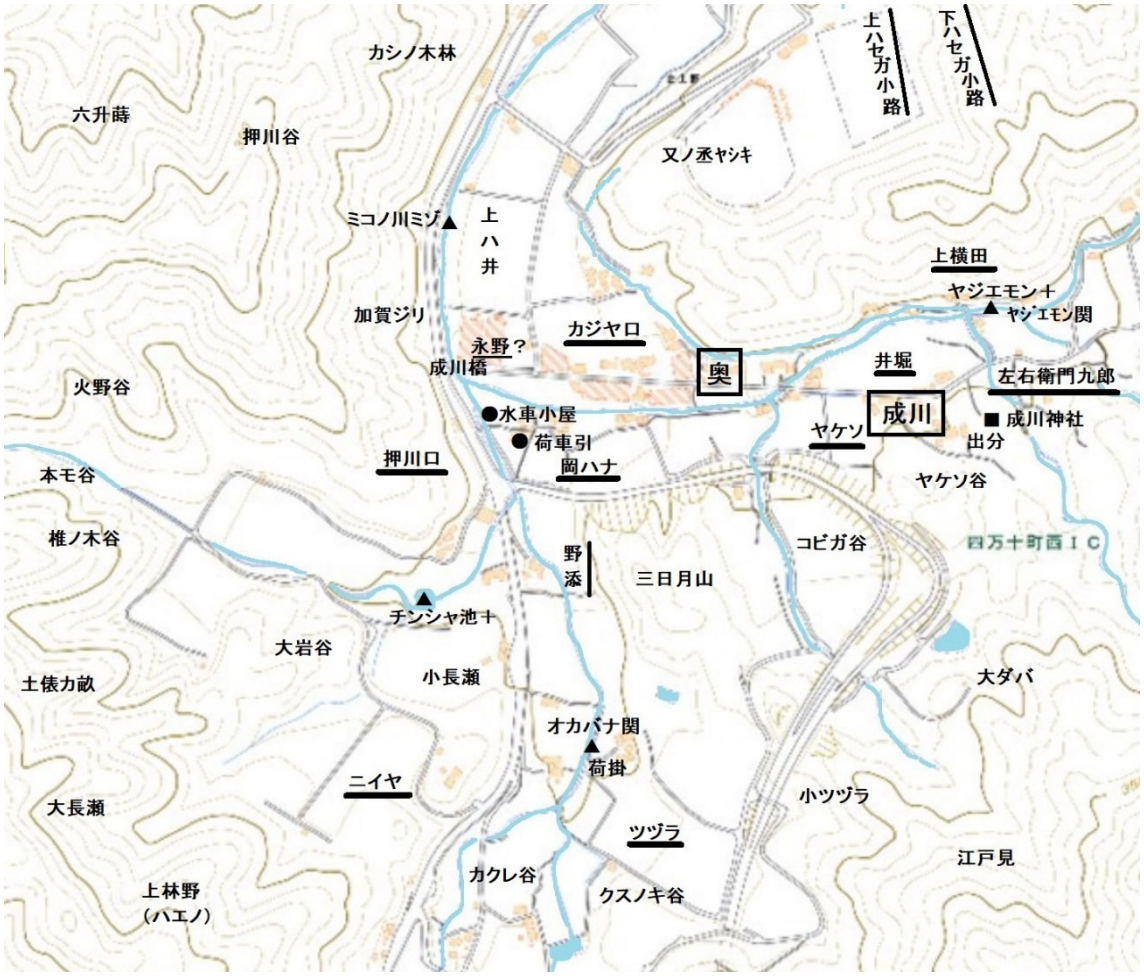


図 17　金上野の地名地図（南部）

どであり、吉見川の堰からの長距離用水路を引いた平地部の田の開発や、谷奥に溜池を築き田地を増やす開発は、近世以降の産物とみてよいだろう。

（二）昭和期の村の暮らし

（1）地名

井堰　　田んぼへの取水堰は吉見川の「オカバナゼキ」「永野ゼキ」「山伏野ミゾ」、大谷の「ヤジエモン堰」（成川神社の前）がある。

ヌスット谷　盗人が入っても行きつかん、それぐらい谷が深い、山が深い。上に上にあがっていたら若井川に行く道がある。

松ケ江川　地域では吉見川を「まつがえがわ」と呼んでいた。

古城　川向こう（西側）の山に古城がある。金上野城跡。

茶屋堂　おへんどさんを接待した茶堂が国道沿いにある。御大師様の石仏を祀っている。

二宮さま　女の神様で美子ノ川神社（二宮神社）ともいう。二宮さまのお宮で夏祭りがあり、夜は相撲が行われた。

（2）集落

17 世紀末の『元禄地払帳』によると、『地検帳』段階の本田高は 197 石余、『地検帳』以後に開発された新田高は 140 石余で江戸前期にも一定土地開発は進んでいた。江戸前期は窪川山内氏が村を知行した。18 世紀半ばの『寛保郷帳』には戸数 53、人数 203、馬 28 とあり、戦国末期から家屋は 2 倍以上に増えている。現在の集落は、上（第 1 常会)、中（第２常会)、下（第 3 常会）で、上は成川神社、中は二宮神社、下は天満宮が氏神である。

集落には、カジヤ（西岡)、炭や材木を町へ運ぶ馬車ひき（田村の「いっちゃん」)、製材、長谷川商店（子供が菓子かって、豆腐、しょうゆを買うくらいの店）があった。魚屋は町の方から行商に来ていた。ミコノ川には昭和 10 数年ごろに金上野部落の信用組合があった。品物を売ったり、お金を貸したりしていた。昭和 20 年（1945）にはなくなっていた。

（3）生業

田　米の後に一部麦を植える人がいた。自分の家で若干のみそを造るため。米は若干農協に出す人もいた。畦には大豆、自分の家で石臼を引いて豆腐をつくっていた。

畑　カライモを畑でつくり、焼酎にもした。

炭焼き　地元の人が炭焼きをしていた。雑木を伐採する。山によってはスギがえい、ヒノキがえいとそれぞれある。50～60 年前にそれぞれに植林したのが今の山になっている。

牛馬　田の耕作は、戦前はほとんどが馬で、昭和 20 年からはほとんどが牛。赤牛で黒牛はほとんどいなかった。1 軒馬を使っていた、牛に比べて足が速かった。ばくろうさんは地元にいた。牛のえさは田んぼのふちの草を刈って与える。

ミコノ川　現在は 12 軒、昭和 20 年は 14 軒。冬は山へいってタキギをとった。畑で野菜を作って女の人が窪川の町へ天秤棒かついでふごに入れて売りに行っていた。豆腐、みそは昭和 30 年ごろまで各家で作っていた。

（4）交通・流通・娯楽

山手側の道　昭和 30 年ごろまでは山手側に道があった。部落の土地をかして国道ができた。

カロト越　峰ノ上にいく峠道。ボンネットバスが 1 車線くらいの道を通っていた。

ミズモチ　見付に越える峠の地名、ヤマモモがあってようとりにいった。ミコノ川の分にもヤマモモがあった。見付の人も採りにきた。

旧自動車学校　もとは松林がある広い場所で競馬をしていた。口神川の玉川まさごろうさんが馬を借りて競馬をしていた。半年に 1 回ぐらい開催され、昭和 20 年頃には年に２～３回行われていて、地域の人も見に行っていた。競馬場は東又地区の遠山にもあった。

芝居　明治 27 年(1894)生まれのおじいさんが芝居をしていた。金上野は芝居のほんもと、窪川町の本家と言われた。浄瑠璃や芝居はぎっちりやりよって上手だった。

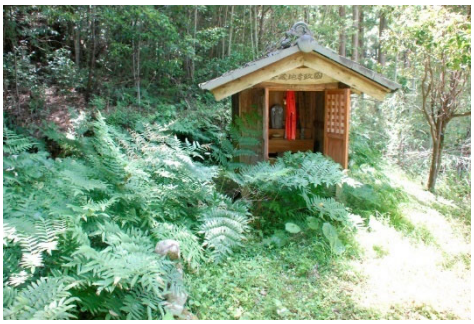
南海地震　昭和の南海地震ではミコノ川の裏山がつえた。家は瓦が落ちて、礎石の石垣も崩れた。トイレや風呂の小屋もかたむいた。

（楠瀬慶太）

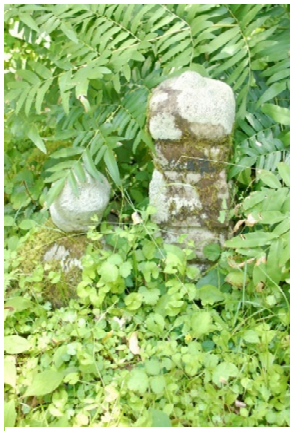
７、大角豆尻　　落人祀る平家神社の祭り

須崎市下郷の新荘川を挟んで南側の集落が「大角豆尻（ささげじり）」である。ササゲは小豆に似た主に赤褐色の豆類で、日本では平安時代から「大角豆」として文献に登場する。小豆と異なり、煮ても皮が破れにくいことから小豆の代わりに赤飯に使われることもある。集落名の来歴は不明だが、戦国末期には集落一帯を「ササケシリ」と呼んでいたことが『地検帳』から分かる。集落の山にある「権現さま」（平家神社）は、平家の落人が隠れたとされる場所で、今も住民によって祭りが行われている。古老への聞き取り調査[13)]を元に、戦国末期の村の景観を復元するとともに村の生活誌を記す。

中村の水田



国正寺地蔵堂



中世の石塔

（一）『地検帳』に見る村落景観（図 18）

（１）集落

須崎市一帯は、京都下鴨神社領津野新庄の領域で、下郷は正安３年（1301）の下地中分で領家分である「上分」に含まれることになり、中世には上分郷に属した。現在も上分の賀茂神社が氏神である。天正 15 年（1587）の『地検帳』（津野上分郷地検帳）では、屋敷地は「トノ谷」３軒、「カウチカ谷」（小氏ケ谷）１軒、「中村」１軒、「中ヤシキ」２軒と寺１軒（国政寺）、「ムクノ木ノ本」１軒、「山タ」１軒、「ウチアカリ」１軒、「ササケシリ」１軒、「西ヲク」４軒である。地名の現地比定からほとんどの家屋が山沿いにあるが、低地部の「西奥」にも屋敷地があったことが分かる。「ササケシリノ上二谷入テ」の記述から、現在の「和田谷川」がある一帯が「ササケシリ」と呼ばれていたことが分かる。「中ヤシキ」にある寺は、現在も同地に残る「国正寺地蔵堂」に比定できる。堂の側には中世の五輪塔、宝篋印塔の残欠が置かれている。『地検帳』の「西ヲク」には「地蔵供田」の注記があり、当時から地蔵を祀っていたのであろう。

（２）土地開発・水利

『地検帳』から土地開発の状況を見ていくと、田地は「カウチカ谷」（1 筆）「中村」（6 筆）「中ヤシキ」（4 筆）「ムクノ木ノ本」（2 筆）「山タ」（２筆）「西ヲク」（2 筆）にあり、主に谷沿いの田と谷の開口部に広がる田が主体であることが分かる。「トノ谷」（3 筆）「ウチアカリ」（1 筆）は全て畠地である。「中村」（1 筆）「西ヲク」（3 筆）「ササケシリ」（11 筆）に

13) 2017 年 6 月 9 日、集落の権現さまの祭りを調査した際、横山倫雄さん（昭和 22 年生）、横山京子さん（昭和 28 年生）、横山武馬さん（大正 14 年）に聞き取りを行った。

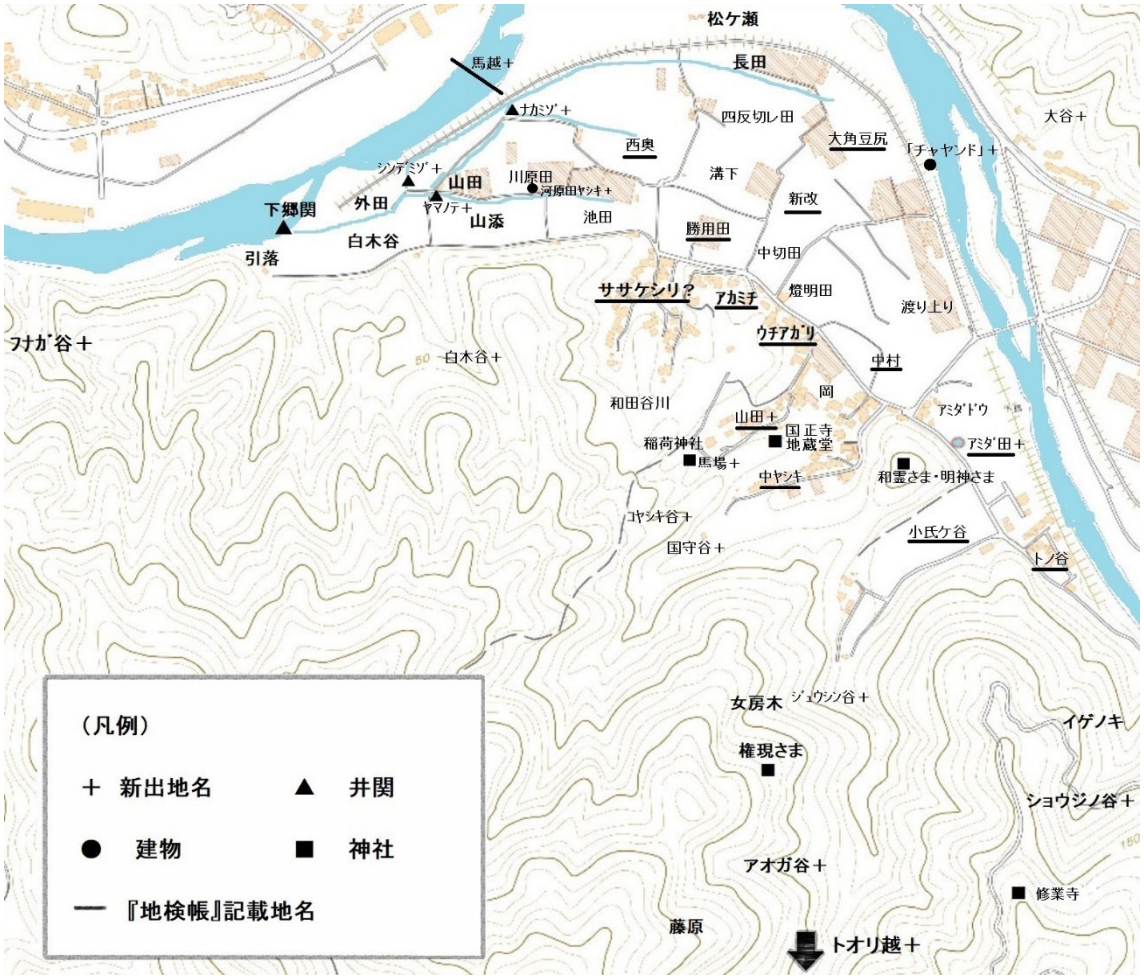


図 18　大角豆尻の地名地図

は「下々」と等級の低い畠地があり、田と混在して畠があったことが分かる。また、「畠田」が「中村」（1 筆）「アカミチ」（1 筆）「ササケシリ」（15 筆）、「西ヲク」（8 筆）にある。

中世の文書には、田地とも畠地とも言えず、田と畠が混在するような耕地を指す「田成畠」「畠成田」「畠田」などの用語が登場する。原田信男氏は研究史を整理して、低湿地では「堀上田」と「島畠」が混在するような島畠景観が中世には各地に存在していた可能性を指摘している[14]。大角豆尻の集落では、特に「ササケシリ」やその低地部の「西ヲク」に多く「畠田」が見られる。等級は「下々」がほとんどで収量は低いが、1 反を超える耕地も多く大きいものでは 8 反にもなる。また、畠田の間に畠地が確認できることから、「畠田」の中に「堀上田」と「島畠」という機能の異なる耕地が混在していると解釈するのには無理がある。上分郷の『地検帳』ではこれほど畠田が多いのは大角豆尻のみである。小豆は畦やイモ畠の間などに植える場合が多いが、ここでは稲作と畑作が同じ耕地で混在した二毛作が行われている耕地と解釈するが妥当だろう。特に「ササケシリ」で畠田は卓越することから、地名の由来となっている「ササゲ」の栽培に適しており、この時期も盛んに作っていたのかもしれ

[14] 原田信男 2008『中世の村のかたちと暮らし』角川選書。

ない。

（二）昭和期の村の暮らし

（1）地名

明神さま・お稲荷さま　集落南西側の小山には、明神さま（和霊神社）を祀っているが、昔はお稲荷さま（稲荷神社）もあった。昔年寄りが「お稲荷様の方が格式が上じゃ」と言っていたという。戦時中の食糧難で、神社を集落1個にすることになり合祭した。今は災害時の避難場所にもなっている。

カワラダヤシキ　明治23年（1890）の大水害で滝のように雨が降り、新荘川筋は米が作れなって河原になった。「河原田」のあたりをカワラダヤシキというが、3軒、5軒と家があって水害では家ごと流れて、山へ逃げたという話も聞いた。昔は田の中にも家があったらしい。山裾を開いていたがために、この水害で山裾も崩れて流れたらしい。

チャヤンド　「チャヤノ元」とも言う。昔、新荘川の渡場で茶屋があったらしい。

馬越　馬が渡れる浅瀬があった。

修行寺　イゲノキの上に修業寺があった。石塔や墓もある。字境に近いが隣の長竹分になる。下分乙にある寺「元亨院」の前身だという話もある。

（2）集落・土地開発

江戸時代の下郷村は、17世紀末の『元禄地払帳』では総地高351石余のうち、『地検帳』時の本田高が246石余、『地検帳』後に開発された新田高が104石余で本田のほとんどは藩主・山内氏の蔵入地であった。明治3年（1870）の『郷村高帳』では、幕末頃の新田高が上分村と合せて1273石余である。『元禄地払帳』の上分村の新田高は559石余なので、江戸中後期に両村併せて新田高は約2倍に増えている。すなわち、新荘川からの長距離用水路を引いて進んだであろう低地部の水田開発は、江戸前期より中後期に大きく進展したことが分かる。

集落は当時から新荘川北側の中氏（なかうじ）と南側の大角豆尻。18世紀前半の『土佐州郡志』で両集落併せて戸数65、人数330、18世紀半ばの『寛保郷帳』では戸数61、人数229、馬44、猟銃1。16世紀末の『地検帳』では戸数44であるから、20軒ほど家が増えたことが確認できる。なお調査時（2017年）の大角豆尻は約40戸120人の集落である。

（3）生業

田は半分に　米の後に麦を作り、麦が作れない所はレンゲ畑にした。田んぼの面積は戦時中から比べると半分になった、当時はこじゃんと作った。畦には大豆を植えた。山ではミツマタ、中氏には炭焼きをする人もいた。

牛馬　戦後田で使った牛は赤牛。牛は新荘川も渡った。戦前には集落の半分くらいは馬を使っていたが、軍馬の供出で徴発された。種付けは、須崎西町の森野の蹄鉄屋が中氏関の堤防の上でやっていた。河原にあったヨシクサは馬のカイバにしていた。

カワウソ　新荘川に鮎取りにいくと、妙なもんをおさえてひっぱりあげちょった。野生のカワウソだった。確かにカワウソは新荘川にいた。

ホウカイダケ（蓬莱竹）　お盆の時には、４～５㍍の竹を２、３本枝付けて切ってきて突先に肥松の束とともに門口に立てて迎え火、送り火にする。集落に生えていて明治の水害の時、この竹につかまって助かった人もいたという。盆の時に取った竹の材は虫に強いという。

（４）交通・流通

集落の道路　戦後道を広げて９尺道（2.7㍍）、昭和 52 年（1977）に４㍍まで広げた。昭和 23・24 年頃（1948・1949）。田んぼの中に初めてリアカーが通れる道を作った。昔は、新荘地域をリードする先見の明を持った人が下郷には３、４人いた。

水切橋　昔は下郷橋の上の関の所を渡って中氏へ行っていた。戦後に橋が架かるまでの橋は板と板をワイヤーでつないだ水切橋だった。

トオリ越　小氏ケ谷（コオジガ谷）から女房木（ニョウボギ）、権現さまをこえて安和の本谷越す峠道（トオリ越）がある。

（５）権現さまの祭り

平家神社と岩屋

集落の山にある権現さま（平家神社）は昔「聖権現宮」と言われていたらしい。戦国末期の『地検帳』には、田地「中ヤシキ南」の項に「聖神祭有」と記述があり、平家の祭りであったかは分からないが、中世から神社の祭りは行われていたらしい。標高 175㍍の山中にある祠の上には、大きな岩があり、源氏に追われて平家の落人が垂木を渡して雨よけの材料に使って生活していたという。『新荘村志』などには、落人は数年で 80 人ほど集まったが、敵（源氏か？）の襲撃を受けて討ち取られた。住民が彼らを追悼するため「平家宮」という祠を建てたと書かれている。集落に残るとうや帳（明治 21 年）には、うどん粉の団子、タケノコの塩もみ、カヤの箸を使って祭事をすることが記されている。

団子とﾀｹﾉｺの塩もみ

神社は戦前には女人禁制で「敷地内には入られん」「女子は行かれん」とよく言われた。祭り以外で山へ行っても遠慮してよう入れなかった。また、集落の人が兵隊に行く時に武運長久を祈っていた。昔は団子も男性が作っていた。団子のベースは、うどん粉、小麦粉と塩。昔は子供の頃は、塩味が付いておらず、まずくて味がなく固くておいしくなかったという。祠の横（右手）に矢竹が生えていて、皮をはいで塩もんでその場で食べたというが、今は苦竹を使っている。

現在は山に土地を持つ氏子 10 人が祭りに参加する。うどん粉の団子やタケノコの塩もみは代表者が家で作って皿に入れ持っていく。山に入る前、塩と川の水で自分の口をゆすいで清める。山道を登って神社につくと掃除をして、団子やタケノコの塩もみ、カヤの箸、酒をお

供えしてお参りをする。団子やタケノコを皆で食べて山を下りる。その後、家に集まって直会をして祭りは終了する。直会には女性も参加する。

（楠瀬慶太）

谷の水で清め

鳥居前で旗を立てる

平家神社の祠内

お参り後に供え物を食べる

団子とﾀｹﾉｺの塩もみを食べる氏子

【謝辞】

なお大角豆尻の調査は、2019 年に逝去された四万十市の津野幸右先生（日本民俗学）にお誘いただき、実現したものである。津野先生には筆者が四万十市在住の頃から何度も民俗調査にお誘い頂き、多くのことをご教示いただいた。成果の公表が遅くなったことをお詫びするとともに、厚く御礼を申し上げ、慎んで哀悼の意を表します。

８、椿原町組[15)]　屋号と再調査の呼びかけ

（一）はじめに

東町の棚田

かつて高知県内の多くの集落で、家屋敷に付けられた呼び名「屋号」が生活の中で当たり前のように使われた時代があった。椿原史談会は町の 53 の大字の内 45 が調査し、1986～2007 年にかけて会誌『椿原史談』で約 800 軒の屋号を報告している。地形や由来、伝承など屋号の属性を詳細に聞き取って記録しており、屋号の位置を地図に落とした報告も多い。県内では屋号の記録はほとんど行われておらず、過疎高齢化に伴う人口流出で集落が変貌する中、町全域で実施された非常に貴重な記録となっている。

一方で、『椿原史談』の報告では屋号の調査が行われていない集落や、名称のみ紹介して屋号の位置が記載されていない集落もあり、資料としては記録が不十分な点も多い。屋号の歴史資料としての価値が認知され始める中（楠瀬 2018）、県内各地で集落の地名や民俗の調査を行う筆者らのグループ「奥四万十山の暮らし調査団」は、2019 年 8 月から椿原史談会の伊藤一博会長と連携し、町内の屋号の再調査を始めた。本稿では、これまでの調査成果を再整理して再調査が必要な地区を抽出し、会員の皆さんに再調査への協力を呼びかけたい。また、未調査地区の一つ・椿原町組での屋号調査の結果についても報告する。

（二）屋号記録の意義―香美市物部町の成果から―

全国で門名や家名、屋地名などさまざまに呼ばれる屋号は、苗字の代わりに家屋敷に付けられた名前である。農工商身分が苗字を持たなかった江戸時代以前には、社会生活の中での「家」の呼び名が必須であり、屋号が苗字の代わりとして機能した。近現代になると、人々は集落内では屋号を苗字代わりに使い、集落外では苗字を使った（梶田 1995）。また、屋号には家の格式や階級的なものを示すものもあり、庶民の家意識を投影したものであり、地域差よりも社会差を濃く映すものであると指摘されている（岡野 2003）。

高知県内の屋号については調査研究がほとんど行われておらず、不明な点も多い。ここではまず、筆者が 2007 年に調査した香美市物部町（旧物部村）の屋号の分析（楠瀬 2018）からその特徴を明らかにし、屋号を記録することの意義を述べる。物部町では 787 軒の屋号を収集し、その位置を全て地図上に記録している（楠瀬 2008）。屋号の空間的な位置や集落内の配置に着目し、室町期の古文書『柳瀬文書』や戦国末期の『長宗我部地検帳』（以下『地検帳』）などの文献史料を組み合わせて分析すると、土佐の山村における屋号の成立と展開の過程が分かってくる。

まず、屋号の成立は古文書から 15 世紀半ばの室町時代までさかのぼることができる。当

15) なお本稿は、楠瀬慶太・武内文治 2019「椿原町組の屋号と再調査の呼びかけ」『椿原史談』44 号を一部改編して再掲したものである。

時、屋号は年貢を賦課される作人層の屋敷と周辺の田畑を表す言葉として使われ、16 世紀の戦国時代も同様であった。中世にさかのぼる古い屋号として「土居（屋敷)」「中屋」「仁井屋」などの屋号が古文書や『地検帳』から確認できる。江戸時代になると、詳細な土地調査が行われ、一地一作人の原則が徹底されるようになり、田畑と屋敷が切り離され、屋敷自体を指す言葉として屋号が使われるようになったと推測される。屋敷数の増大は、江戸前期の 17 世紀の長距離用水路開削による新田開発と並行して進んだようで、屋号の多くは江戸時代に命名された可能性があると考えている。

集落における屋号の名付けは、「本村モデル」と「脇村モデル」の２つのパターンが確認できた。「本村モデル」では、鎌倉期に村を開発した名主層の屋敷である「土居」と氏神を祭る「神社」、「お堂（寺)」という初期に作られた構造物を中心に屋号が付けられていく。「土居」の北側だから「北」、西側だから「西」など集落中心部にある「土居」を中心に屋号が付けられた。また、「宮ノ後」「堂ノ前」など「神社」「お堂」との位置関係で付けられる屋号も確認できた。「脇村モデル」とは、おもに南北朝期以降に本村より遅れて開発された脇村（枝村）の屋号の名付けのパターンである。ここでは、「中屋」や「仁井屋」の屋敷を中心に、「西」「東」などの屋号が付けられた。また、脇村にも氏神の「神社」が作られ、位置関係から「宮ノ前」などの屋号が付けられていることも確認できた。

このように、数多くの集落の屋号を調べることで、地域の開発や家の広がりがパターン化できるほか、どのような言葉が屋号として使われたかなどを探ることができる。古文書などの文献史料が少ない地域でも、屋号が重要な歴史資料となり、名もなき村の人々の歴史を明らかにする材料となるのである。また、屋号の位置を地図上に落とし、その属性を記録することは、山村豊かなりし近現代の集落の姿を後世に伝えることにもつながる。どのような人々が暮らし、生き、地域を支えたのか。屋号を通じて集落の記憶がよみがえってくる。すなわち屋号の位置の把握と屋号にまつわる伝承やエピソードを記録することで、屋号を地域の歴史を伝える地域文化資源として後世に伝えることができるのである。

（三）梼原町における屋号調査の状況

梼原町の６つの行政区に分けて屋号の調査状況を『梼原史談』から整理する（表１)。屋号の調査状況は、ホームページ「高知工科大学フィールドデータベース」の地図から確認できるので、こちらも参照願いたい。

「調査」が済んでいるのか、未調査なのか、「伝承」の聞き取りが済んでいるのか、未調査なのか、「位置」の確認が済んでいるのか、未調査なのかという３項目を調べた。「再調査」の項目では、未調査の集落を「◎」、位置が分かっていない集落を「〇」、伝承が未調査の集落を「△」、調査・位置・伝承ともに記録されている集落を「×」で示し、再調査の優先度を示した。各集落の家屋ごとの調査の有無は、詳細データを伊藤会長に渡しているので聞いてもらいたい。

梼原東区の川口、川井、豊原、初瀬区の家籠戸、大野地、影野地、松原が調査されていない。「奥四万十山の暮らし調査団」でも再調査を行っていく予定だが、全てを調査するには

まだまだ時間がかかる。以前の『梼原史談』の調査を参考に、会員の皆さんで再調査の優先度の高いお近くの集落で聞き取り調査を実施し、成果を『梼原史談』に報告していただけるとありがたい。調査には住宅地図を使うと、家の場所と住人の名前が載っていて調査がやりやすい。調査データがそろえば、伊藤会長らとも協力して物部町で行ったような梼原の屋号の歴史を分析したいと考えている。

失われつつある屋号への関心は近年高まっており、土佐町石原地区では、住民団体が主体となって屋号調査を始めており、筆者もそのお手伝いをしている。地域の歴史を住民の手で記録し、普及させ、後世に伝えていく。新しい取り組みが県内で広がることを期待している。

表１　梼原町の屋号調査状況

行政区	大字	集落名	調査	再調査	伝承	位置	梼原史談	備考
四万川区	井高	上井桑	済	×	済	済	24号	
四万川区	井高	下井桑	済	×	済	済	15号	
四万川区	井高	高階野	済	×	済	済	24号	
四万川区	坪野田	坪野田	済	△	未	済	24号	
四万川区	文丸	文丸	済	△	未	済	25号	
四万川区	坂本川	坂本川	済	△	未	済	24号	
四万川区	神の山	神の山	済	△	未	済	25号	
四万川区	本も谷	本も谷	済	○	済	未	10号	
四万川区	中の川	中の川	済	△	未	済	23号	
四万川区	茶や谷	茶や谷	済	△	未	済	23号	
四万川区	上組	上組・名ノ谷	済	×	—	—	24号	屋号なし
四万川区	東川	東川・奥畑	済	×	済	済	17号・27号	
四万川区	下組	下組	済	×	済	済	23号	
四万川区	冨永	冨永	済	△	未	済	25号	
四万川区	六丁	六丁・曲渕	済	○	済	未	15号	地図から位置特定が難しい。曲渕の屋号は不明
四万川区	東向	東向・家ケ谷	済	△	未	済	24号	家ケ谷の屋号は不明
越知面区	田野々	広瀬・田野々・アガリ・松尾谷・戸々ケ谷	済	△	未	済	25号	戸々ケ谷の屋号は不明
越知面区	永野	永野・峰の段・口栗	済	△	未	済	25号	
越知面区	井の谷	井の谷	済	△	未	済	25号	
越知面区	太田戸	太田戸	済	×	済	済	8号	
越知面区	横貝	横貝	済	△	未	済	26号	
越知面区	上本村	上本村	済	△	済	済	8号	大郷の屋号は不明
越知面区	下本村	下本村・北浦	済	△	済	済	8号	北浦の屋号は不明
梼原西区	松谷	松谷・上屋敷	済	△	未	済	25号	
梼原西区	上成	長谷・上成・虎枝川・山首・正井野	済	△	未	済	25号	地図が小さく位置の判読難
梼原西区	宮野々	宮野々	済	△	未	済	12号	
梼原西区	広野	広野	済	×	済	済	27号・32号	
梼原西区	竹の藪	竹の藪・成藪	済	△	未	済	27号	
梼原西区	上西の川	上西の川	済	△	未	済	27号	
梼原西区	下西の川	下西の川・宮戸	済	△	未	済	27号	
梼原東区	後別当	後別当	済	△	未	済	26号	
梼原東区	大蔵谷	大蔵谷	済	×	済	済	9号	
梼原東区	梼原	町組	済	×	済	済	44号	
梼原東区	川西路	川西路	済	×	済	済	12号	
梼原東区	飯母	飯母	済	△	未	済	22号	
梼原東区	仲間	仲間	済	○	済	未	8号	地図がなく位置が一部不明
梼原東区	川口	川口	未	◎	未	未		
梼原東区	川井	川井	未	◎	未	未		
梼原東区	豊原	豊原	未	◎	未	未		
梼原東区	太郎川	太郎川	済	△	未	済	26号	
梼原東区	神在居	神在居	済	△	未	済	26号	
梼原東区	仲洞	仲洞	済	△	未	済	22号	
初瀬区	仲久保	仲久保	済	△	未	済	22号・24号	
初瀬区	初瀬本村	横野・本村・道明	済	×	済	済	24号	
初瀬区	上折渡	上折渡・藪ケ峠	済	△	未	済	11号	
初瀬区	下折渡	下折渡	済	△	済	済	10号	
初瀬区	佐渡	佐渡	済	△	未	済	24号	
初瀬区	大野地	大野地	未	◎	未	未		
初瀬区	影野地	影野地	未	◎	未	未		
初瀬区	家籠戸	家籠戸	未	◎	未	未		
松原区	中平	中平	済	○	済	未	13号	地図が小さく位置の判読難
松原区	大向	大向・大藪	済	△	未	済	27号	
松原区	松原	鳥巣の駄馬・本村・大串	未	◎	未	未		
松原区	島中	島中・影地	済	◎	未	未	27号	島中のみ調査
松原区	久保谷	上久保谷、下久保谷	済	△	未	済	27号	

（四）梼原町組の屋号と民俗誌

2019 年 8 月に行った伊藤会長（昭和 31 年生）への聞き取り調査を元に、梼原町組（大字・梼原）の屋号および昭和 30～40 年代ごろの生活の記憶についての民俗誌を記す（図 19・図 20）。また、隣接地の大字「川西路」「大蔵谷」については、明神辰子さん（昭和３年生）からの聞き取りも反映した。

石休場（いしやすば）　幕末の志士、那須信吾の邸宅跡の屋号。坂本龍馬が土佐脱藩の際に一泊したとされる。谷沿いの平地に屋敷があったが、現在は更地になっている。屋敷手前の峠道は「ナスノトウ」の地名で呼ばれる。峠を越えた場所の休み場所から取られた屋号だろう。休み石のような大きな石があったのだろうか。なお那須氏は東近江から流れてきた一族で、滋賀県犬上郡豊郷町石畑の近江那須城と関わりがあるという説がある。那須城は、源平合戦で活躍した弓の名手、那須与一宗高の次男の石畠民部大輔宗信によって築かれたとされる城である。

坂下（さかもと）　「石休場」の谷を挟んで対岸の屋敷の屋号。坂本氏が居住。戦国末期の『地検帳』にも登場する田・屋敷の地名だが、この「坂下」は検地の順番などから化粧坂

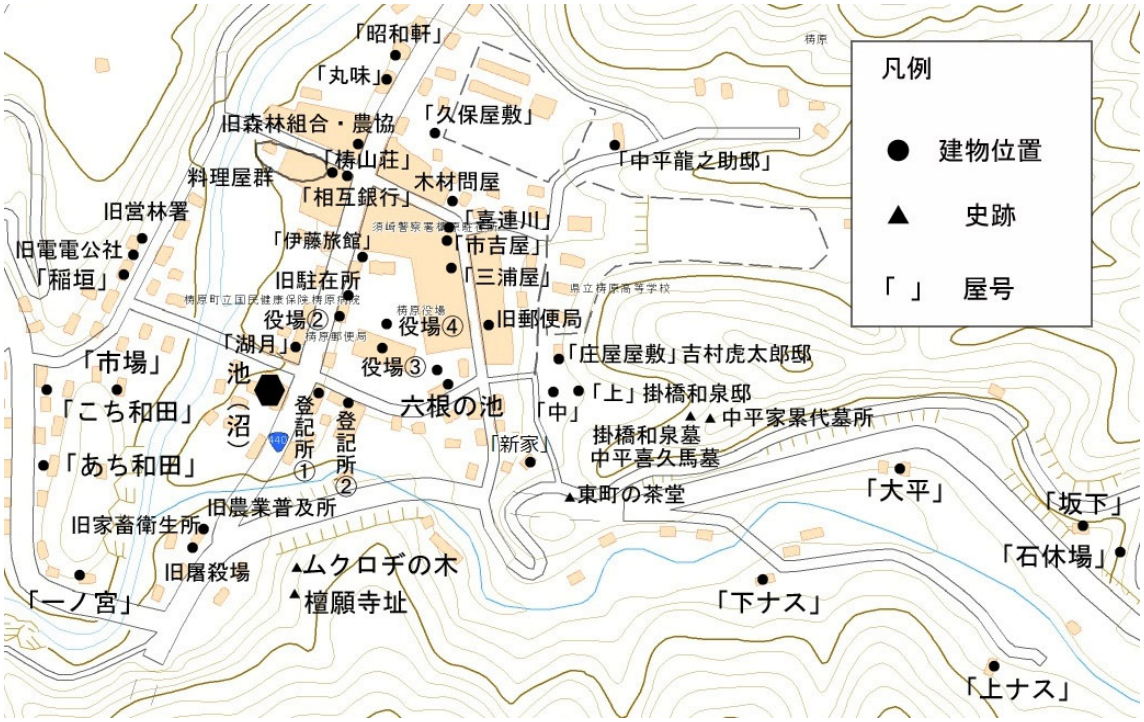


図 19　椿原町組の屋号地図（中心部）

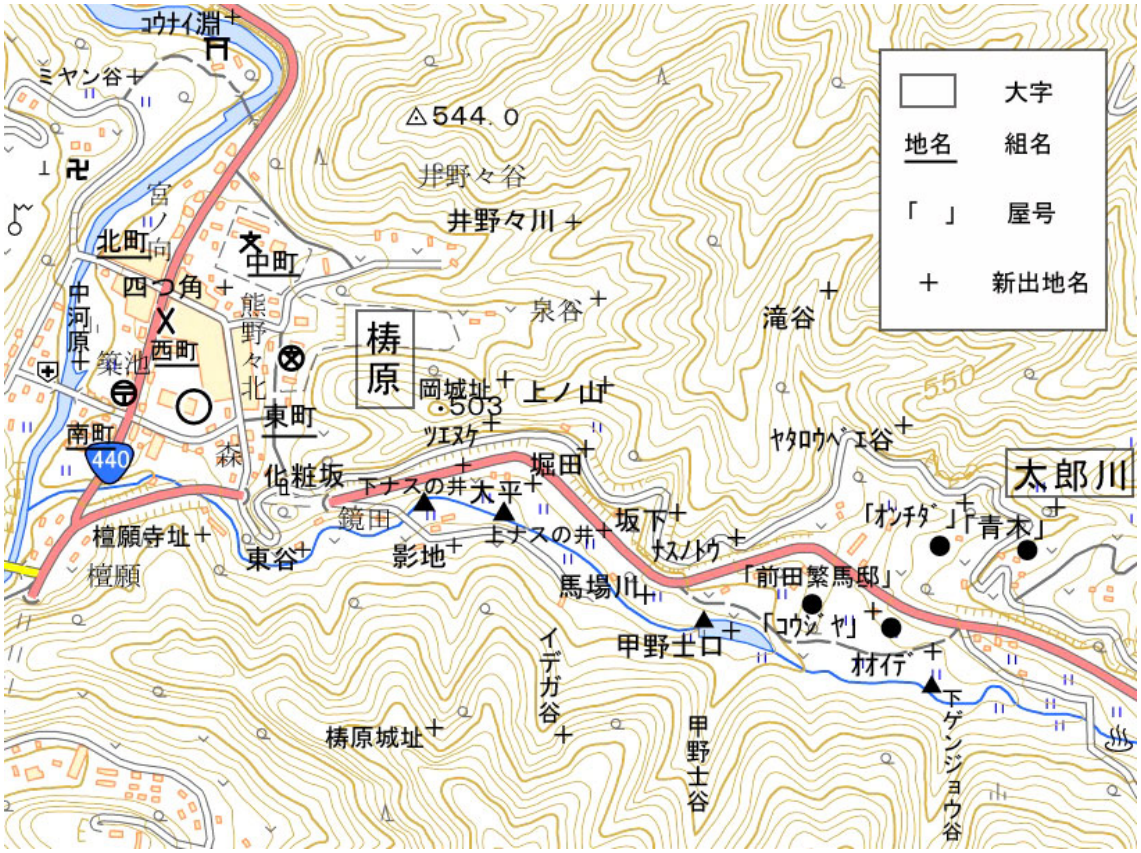


図 20　椿原町組の屋号地図（広域）

を降りた現在の東町あたりにあった地名と推測される。居住者が引っ越す際に屋号を持っていて、引っ越し先で以前の屋号を名乗る場合もあるが、この場合は不明。

大平（おおひら）　新しくできた国道 197 号下にある屋敷。伊藤氏が居住。「大平」は屋敷周辺の地名でもあり、屋敷の下には東谷（馬場川・太郎川とも）沿いまで棚田が広がる比較的開けた土地である。土佐の山村では、谷の下にある開けた土地を「オオヒラ」と呼ぶ場合が多い。せまち直しをする以前は、「一反（いったん)」「六升（ろくしょう)」「八升（はっしょう)」などの名前が付いた小さな田がいくつもあったという。東谷の河道は「大平」の西で不自然に蛇行している。1960 年代後半に川沿いの田んぼを掘ったことがあったが、地中から砂利が出てきた。川沿いの田は河川の流路を変えて、両岸に石垣をついて作られたものかもしれないという。また、国道ができる以前は「大平」の屋敷の上にも田んぼがあり、「掘田」と呼ばれる真四角な田もあった。また「堀田」があった場所には昔、前田家の屋敷があったという話もある。

「大平」は、戦国末期の『地検帳』にも登場し、一帯に田８筆、畠２筆、屋敷２戸があった。２つの屋敷にはそれぞれ中平介衛門、十良衛門が居住。「大平」の田２筆には、それぞれ「先年三宮九良左衛門本地勝興代ヨリ」「先年中ノ平左衛門本地勝興代ヨリ」と注記がある。苗字を持つ武士層の本地（従来の土地）であったことが分かり、南北朝期に梼原に居着いた中平氏らによる土地開発が行われた比較的古い田であることが分かる。勝興とは、江戸後期の地誌『南路志』所収の中平氏系図によれば、高岡郡を支配した津野氏 17 代・勝興のことで、「天正六年戊寅十一月廿一日、梼原之内野々川入道谷ニテ死ス、新屋敷二墓有」などと記述がある。

中平氏は、南北朝期に津野家から分かれた武士層で、戦国期には津野家の家臣として梼原に多くの土地を持ち、江戸時代には庄屋職などを務めた。三宮氏についてはよく分からないが、津野氏系図に「延喜十九年本村三宮屋敷に住し土居をなす。同年築城、同廿年在城」(『梼原町史』) とあり、この「三宮屋敷」に由来する一族ではないかと推測する。延喜 19 年とは平安時代の 919 年。延喜 13 年に伊予国から土佐国に入り、梼原や津野山の地を開拓したと伝わる津野経高の伝承である。なお伊藤氏は東近江の出身で、江戸時代は高知城下で藩に仕えていた。本家は高知市春野町にあるという。

上那須（かみなす）　東谷南側にある大字「太郎川」との境付近の屋敷を呼ぶ屋号。近くの東谷に水路「上那須の井（ゆ)」の取水口がある。

下那須（しもなす）　東谷南側の山際の屋敷を呼ぶ屋号。周辺の土地は「影地（かげち)」と呼ばれてた。「影地」は『地検帳』にも登場する田の名称で、「先年下元右京亮本地勝興代ヨリ」と注記がある。土佐の山村では日当たりの良い南向きまたは東向きの土地を「日ノ地（ひのぢ)」「日浦（ひうら)」などと呼び、対岸の日当たりの悪い土地を「影（かげ)」と呼び、集落や土地の開発は「日ノ地」から「影」へ広がったと考えられている（楠瀬 2018)。近くの東谷には、「鏡田（かがみた)」の田に水を供給する水路「下那須の井」の取水口がある。

東町の茶堂　江戸初期の慶長 9～11 年（1604～06)、津野山郷の各村に作られ、弘法大師、考山霊、三界万霊を祭ったと伝わる草ぶきのお堂。江戸時代には「辻堂」と呼ばれ、村と村の境界にあった。現在、「石休場」「坂下」「大平」「上那須」「下那須」は大字・梼原の「東町」の組だが、以前は太郎川分だった。東町の茶堂はちょうど梼原村と太郎川村の堺にあり、旧村堺の歴史を語っている。東町の茶堂は、太郎川方面から続く旧道の峠「化粧坂（けわいざか)」にある。峠の南側にある「鏡田」は、「化粧」とセットになった地名である。なお『地検帳』には「ケワイ坂」の地名が記されているが、「鏡田」は記載がない。「鏡田」はいつ頃生まれた地名なのだろう。

東町の茶堂

上・中・新家（うえ・なか・しんや）　東町の茶堂から町側に坂を下りた所にある３軒の家を呼ぶ屋号。いずれも掛橋氏が居住。太郎川の東谷から取水して続く長距離用水路「オオイデ」が「化粧坂」を経て町側に落ちてくる場所にある。「上」は幕末の神職・掛橋和泉の屋敷があったが、茅葺きの建物は現在「庄屋屋敷」に移築されている。「新家」には立派な門が今も残っている。江戸時代、掛橋氏は梼原村で神職を務めていた。

庄屋屋敷（しょうややしき）　安政６年（1859）年に梼原村の大庄屋になった幕末の志士、吉村虎太郎の屋敷があった場所の屋号。梼原の町を見渡せる丘の上にある。戦国末期の『地検帳』に登場する「岡ヤシキ」周辺にあたる。周辺には一部だが田んぼがあり、棚田が広がっていたというかつての町組の景観を残す場所である。

くぼ屋敷　梼原小学校沿いの一角を指す地名。戦国末期の『地検帳』に「窪タ」と呼ばれる地名が記載されており、検地順などから「くぼ屋敷」周辺に比定したい。『地検帳』には町組の多くの田畠が記載されているが、そのほとんどが新開地となっている。それ以前の中世には、「大平」や「影地」の方が現在の町中より土地開発が進んでいたことが推測される。現在町化が進み、大きく景観が変貌しており、『地検帳』に記載された「カマクボ」「ヤキタ」「大コヤシ」「ヲカ」「タノウチ」「イノ谷」「上屋越」「北谷」「宮ノ谷」「ミチノノ下」などの田畠の地名の所在地が分からない。ご存じの方があればご教示願いたい。

旅館や店の屋号　旅館の「市吉屋（いちよしや)」「喜連川（西村旅館)」「昭和軒」「三浦屋」「ホテル梼山荘」「伊藤旅館」、仕出屋の「湖月（こげつ)」など現在も続いている店もあり、場所を確認できた。魚屋は「丸味（まるみ)」のほかに原田さん、松本さんがやっていて計３軒あった。鍛治屋は町組に２軒（横山さん・影浦さん)、川西路にも１軒あった。川西路には、「ミヤン谷」から竹で水を引いて「イクノチョウ」という銘柄の日本酒を造っている造り酒屋があった（稲垣さん)。ここが無くなった後、町組に造り酒屋ができた（氏原さん)。中町には木材問屋（西山さん）もあった。北町の梼原公民館の建物は「映画所」で戦後すぐに町組の人がお金を出しあって建てた。木戸銭を払って映画を見る場所だった。旅役者が来

て、デコ芝居や猿回し、地芝居などの興業が行われることもあった。「役場」は３回移って現在の場所、「登記所」も１回移っている。『梼原町史』によると、他にも大正・昭和期には「泉水」「敷島」「朝日楼」「関口料理店」などの屋号を持つ料理店、旅館「梅の家」があったそうだが、現在はなくなっており、場所が分からない。

牛・馬・羊　各家に耕作用の牛が飼われていて、1960 年代に黒牛から赤牛に変わった。檀願寺跡とされる場所はなだらかで牛市場や農業学校の実習場があった。ヤギや戦後毛皮が取れるということで羊を飼った家もあった。その後、豚を飼った家もあった。

田んぼ　昭和 30 年代には、田んぼは米の単作になっていて麦は作っていなかった。田のあぜには大豆を植え、家の周りでキビ、畑にはカライモを植えていた。そうず（水車）が東谷沿いにも何カ所かあってキビをついていた。町組の用水路は、太郎川の東谷から引いた「オオイデ」と大蔵谷の梼原川から引いた「大蔵谷の水路」が南町で合流して梼原川に落ちる形だった。南町のあたりは湿地帯で、沼のような池があり、田んぼもあった。一帯は湧水が沸くような場所で、ガマが生えたりしていた。

カヤ山　肥料や牛のえさにするカヤを取る採草地は、町の周囲の「えぼし山」「えいがね山」「ぼうず山」「こうのし山」などがあった。「えぼし山」は大規模な採草地だった。いずれも村の山で、早く刈りに行ったもん勝ち。「ばいがり」と言って、早朝早く山へ行って草のくらに自分の名前を書いたものを付けていた。

焼畑　戦後すぐは「ヤブコギ」と言って、山を焼いて作物を作る焼畑（切畑）をする人も多くいた。規模の小さいものは山の至る所で行われ、キビを植えた後に紙幣の原料になるヤナギ（ミツマタ）を植えていた。畑地ではソバも作られていた。

炭焼　「上（うえ）の山」ではナラやカシを焼く炭焼も行われていた。作っていたのは黒炭。

川淵　子どもたちは東谷で泳ぐことはなく、梼原川の「コウナイ淵」と丸太の橋だった築地橋南側の淵で泳いでいた。川ではハヤゴ、イダ、ドンコ、アカザ（ゴス）などを取って遊んだ。ウナギもいた。鮎は放流で「梼原の鮎はサバばあある」と言われるほど大きかった。

材木搬出　松原や初瀬の一部では昔、管流しで材木を出して四万十川を流し、途中大正で筏に組んで四万十市の下田まで流していたらしい。この地域には船大工さんもいた。それ以外は、牛などで愛媛へ運び出すことが多かった。戦後の木材景気では、山師は宇和島の方へ仕事に行き、内子で芸者遊びなどどんちゃん騒ぎをしたらしい。

【参考文献】

岡野信子 2003『屋号語彙の総合的研究』武蔵野書院

奥四万十山の暮らし調査団編 2018『土佐の地名を歩く』地域資料叢書 17

梶田純子 1995「屋号について」『研究論集』61、関西外国語大学

楠瀬慶太 2008『新韮生槇山風土記』花書院

楠瀬慶太 2018「土佐山村の屋号研究試論」『高知大國文』49

９、藤ノ川の盆供養

四万十町東又地区の藤ノ川で 2019 年 8 月 12 日に行われた初盆の祭事について報告する[16)]。盆は精霊をあの世から迎え、生者とともに祀る霊祭、盆棚は訪れてくる精霊のために、祭壇（仏壇）とは別に設けた棚である（『国史大事辞典』）。

写真１

まず、家の縁側脇に置かれた盆棚を見てみよう。屋根の上に提灯をかざし、その下に盆棚を据えている（写真１）。外に設けた盆棚には集落の人もお参りに来れるという。骨組は木、屋根は竹で組み、ヒノキの葉で飾った２段構造である。神事が終わった後には、上段に遺影と木製の位牌、水、酒、下段には箸と祭壇に供えていた団子・寒天・巻き寿司・刺身をそれぞれ小皿に入れて供えた。両側の竹筒には紙の弊を付けたサカキ、花を入れている（写真２）。盆棚の一隅に無縁仏のための無縁棚が設けられる場合もあるが、ここではそのような別棚はない。

写真２

御弊は太夫さが切って作る。中内家の親族も手伝い、玉串用に弊をサカキに巻き付けていく（写真３）。また細竹の先を刀子で削って御弊を付け（写真４）、床の間の祭壇右側に置いた（写真５）。

写真３

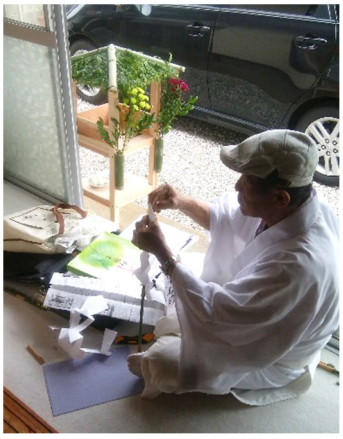


写真４

写真５

16) 盆供養は、藤ノ川集落の中内家で故中内富香さんの初盆。祭事を取り仕切った太夫の山中さん（与津地）にお話しを伺った

祭壇には果物や野菜、白団子、観寒天、酒などが置かれる。位牌・遺影の両側には火を付けたろうそく、「和魂幸魂奇魂守里幸比給辺」などと記された御幣がサカキとともに置かれた。右脇にも茶碗の上に火を付けたろうそくが置かれた（写真６）。祭事が始まり、親族が一人一人玉串を供える（写真７）。祭事が終わると、皿鉢を持ち寄り直会が行われ、解散となった（写真８）。

（楠瀬慶太）

写真６

写真７

写真８

10、奥四万十山の暮らし調査団の村落調査に参加して

高知大学の卒業論文で、宿毛市小筑紫地区の方言について地域調査を計画していた私は、2019 年 6 月、「奥四万十山の暮らし調査団」の楠瀬慶太氏による四万十町の志和・見付集落での調査に同行した。地域調査の手本を見て学ぶためだ。楠瀬氏は、九州大学服部英雄研究室の調査方式をベースとした調査を県内各地で行っている[17)]。

調査は事前の文献調査と現地での聞き取り調査からなる。まず大切なのは事前の準備である。地図、地名辞典、広報誌、町史など、文献に記載されているあらゆる情報に当たり、対象とする地域専用の質問項目を作成する。また、対象地域の住宅地図も確認し、川･谷･史跡などに色を付けておく。さらに『長宗我部地検帳』などの県内の歴史資料にあたり、確認された地名を現在の切図(小字図)と照合しておく。準備を綿密に行うのは、既存の文献にない情報を優先的に得るためである。また、既存の情報をもとに尋ねることで、話者が地名や屋号などの記憶をたどる負担を軽減することができ、より多くの情報を引き出すことが可能となる。

現地調査は、老年層かつ地域に暮らしてきた方を対象として、事前調査で準備した質問項目に沿って聞き取りを行う。この日、志和の古老・山野上香江氏への調査は約 2 時間であった。前半は村の概要を知るための質問、後半は地名を中心とした質問という構成である。

聞き取りは、山野上氏の生い立ちから始まり、家の生業、集落全体、屋号へと話題が展開していった。屋号の話題では、その場にいた地元の方々とも協力し、広げた住宅地図上に家の位置を書き込んでいく形で記録が行われた。この間、不明な単語や内容にはすかさず質問する、発音を繰り返す、内容をこまめにまとめて確認をとるなどして、可能な限り厳密な記録となるような工夫がなされている。

聞き取りの後半では、文献に現れる屋号や地名を読み上げてゆく。山野上氏がその屋号や地名を知っている場合には、住宅地図上でその位置を確認し、場所の様子や土地利用についても尋ねる。また、谷、海の地名や旧道の位置なども確認する。地名の指す地域を確認する際、事前調査で色を付けた川･堰･橋･寺社などの目印が活躍していた。これらの聞き取りによって、江戸時代の屋号が確認されたり、戦国時代の地名が確認されたりする場合もあった。

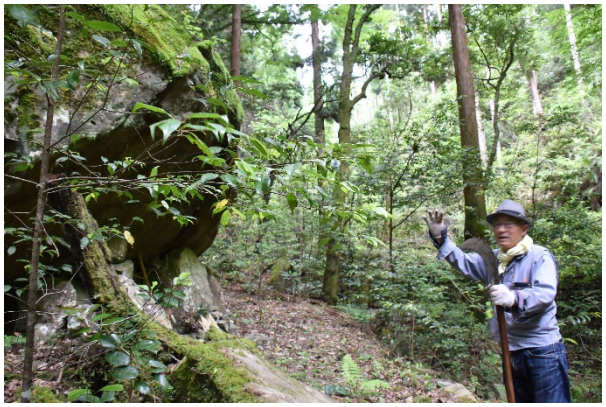
最後に生業や暮らしについての質問を行う。具体的には漁業、炭焼き、買い物、娯楽、遊び場、行商、終戦時の話などである。こうして調査開始から約 2 時後、屋号･地名･暮らしに関する質問を通して、志和の地名と生活の概要が描き出された。

同日、経験を積ませてもらうということで、見付集落で郷土史家の林一将氏に聞き取りをさせていただいた。調査票は林氏と共有しており、私自身も事前に頂いた資料も確認していたのだが、楠瀬氏の調査のようにスムーズにはいかず、最終的には林氏と楠瀬氏のやり取りを聞くばかりとなってしまった。

地域調査は地域に関する文献や調査票さえあればできる、というものではない。ましてや、要点を押さえながら話を展開させつつ短時間で聞き取りを行うのは、一朝一夕にできるこ

17) 奥四万十山の暮らし調査団編 2018『土佐の地名を歩く』を参照。

とではない。この日の調査やこの日以降の自分の調査を通じて痛切に感じたことである。


聞き取り終了後、史跡を案内してくれた林一将氏

どのような分野の地域調査をする場合にも、地域に暮らす話者世代の「当たり前」(戦前の生活や、生業に関する基礎知識・政策など)への理解は必須であると考える。また、会話を弾ませ、暮らしの活き活きとした情報を得るためには、地形や気候、地域同士の関係などの地理的な知識、対象地域に関係のある歴史上の人物や用語などの歴史学の知識などもあった方が良い。一回一回の調査や報告書の裏側には、調査者の学習や経験の積み重ねがあることを改めて実感した。

(齋藤香織)